

---

# 感染者の牙

岡田健八郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

感染者の牙

### 【Nコード】

N4889W

### 【作者名】

岡田健八郎

### 【あらすじ】

神奈川県藤沢市のとある町。田舎とも都会ともいえないこの町のとある中学校。生徒達はいつも通り授業を受けるはずだった。しかし、学校が突然、特殊急襲部隊SATによって封鎖・隔離された。さらに狂暴化する生徒や職員達。現実離れしたパニックが生徒たちを襲う。

## 開放

プロローグ

神奈川県藤沢市のとある大きな病院。ここでたくさんのお患者はいつもどおりベッドに寝て点滴を受け、看護婦はいつもどおり患者の看護などで仕事をしていた。

しかし、病院の裏口から怪しい3人組が鍵を壊して中へ侵入した。廊下を進みエレベーターで地下2階へと降りた。

エレベーターの扉が開いた瞬間、目に入った光景はたくさんのお動物が檻に閉じ込められていた。動物たちは3人組に気づくか否か一斉に吠え出した。3人組が檻を開けようとするや突然、医者と思われるしき人物が現れ、3人組に気づいた。

「何をしてるんだ！」

医者は三人に叫んだ

「この子達を自由にするのよ」

1人が医者を見ずに答えた。声としゃべり方からして20代後半の女性だろう

「動物愛護団体か！よすんだ、そいつらは<感染>しているんだぞ！」

女性ともう一人の大柄の人物は無視していたが小柄の男性が半信半疑で医者の話を聞いた。

「感染つて、何に感染してるんだ？エボラか？」

医者は焦っていた。

「違う！新種のウイルスだ。頼む、信じてくれ・・・」

医者の説得を聞かず動物の檻をバーナーで焼き切ろうとしていた。医者は警報を鳴らそうと奥まで走り出した。小柄な男性が追いかける。そんな2人を無視して、女性と大柄の男性は檻をバーナーで切った。その瞬間、檻の中の猿が走り出した。自由を求め出口へ走っている。2人はそう解釈した。しかし猿は出口めがけて走っていない

かった。女性  
の首筋を  
めがけて  
跳んだ。

## 変わらぬ日常・・・（前書き）

### 登場人物

相沢信二・・・大羽中学校生徒。優等生で運動神経抜群の容姿の整

った人。性格は面倒くさがり屋で皮肉屋。友人は慎重に選ぶため少

ない

のたりのようすけ

野田良助・・・大羽中学校生徒。信二の友人。成績は悪いが運動神

経は信二に負けない。熱血少年

かすまとりえん

和真鳥円・・・高レベルのオタク。軍事、アニメ、歴史などの知識

が豊富。成績は良い。慎重が低く、めがねを掛けている。信二の友人

ソフィー・ヴェルネ・・・大羽中学生徒。フランス人。金髪でかな

りの美少女。優等生で誰にでも優しいためかなり人気がある。信二

の友人で彼に想いを寄せているため彼と話す際、緊張しすぎてパニ

ックを起こす

やまたたろう

山田太郎・・・成績は良くもなく悪くも無い。身長、体重、運動神

経ともに平均で容姿も個性も普通で個性がない。信二の友人。実は

### 同性愛者

おかもとひろき

岡本紘輝・・・信二の友人で一番まとも。信二とは幼稚園からの仲

で、彼に最も信頼されている。

たけだゆう

竹田優・・・幼い頃に心臓を患ったため、身長が低く、運動神経が

無いに等しい。信二の友人

たちばなゆうか

立花裕香・・・生徒会長。無口。とても真面目な性格。優等生でソ

フィーに負けないほど美少女。かなり人気がある。昔、事故なあっ

た際、紘輝に助けられたため、軽症ですんだ。その日以来、紘輝に

好意を寄せてる。信二と紘輝の幼馴染

なかむらだいすけ

中村大助・・・大羽中学校の熱血教師。野田とは気が合っ

くろきだいき

黒木大輝・・・大羽中学校社会教師。かなり冷静な性格。

くろきひかり

黒木百合・・・大輝の妻。白衣が似合うロングヘアの美人で保健

室の先生。かなり人気があつて彼女目当てに仮病する生徒が多い

\*この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件は一切関係ありません

## 変わらぬ日常・・・

相沢信二はいつもと変わらぬ道を歩いていた。変わった事といえば、今年の冬は去年より寒い

信二は面倒くさそうに道を歩いていた。車で行けたら楽なのに。そもそも学校自体面倒くさい。家のベッドですつと寝ていられたら、どれほどの幸せなんだろう。信二そはそう確信した。

そんな信二のもとに駆け寄る影があった。

「寒そうにするんじゃない！男ならしゃきつとしろ！しゃつきと」  
野田良助だ。本当に面倒くさい奴だ。冬なのに半そでの制服着やがって。こんな熱血野郎を友達にしなきゃよかった。信二は少々後悔していた。しかし、野田と一緒にいると不思議と暖かくなる。夏は暑くなるけどな。

「信二君。デッドライジング2ついに買ったんだ。試しにうちで遊ぼうよ。」

信二は野田以外の人物に突然話かけられて、びっくりした

「何だ・・・鳥円か」

和真鳥円。かなりのオタクだ。うちの学校でこいつの右に出る者はいない。昨日なんて、1日中深夜アニメの話ばかり聞かされた。エンジンジェルなんとかだっけ。

「鳥円。何回いえばわかる？俺は無双ゲームに興味はない。それにそれ18禁だろ？」

「ただの18禁じゃないぞ。ゾンビ無双パラダイスゲームだ。このゲームのテーマはゾンビと人間と本当に怖いのはどっちか？でサイコパスという強敵がー」

また始まった。1日中続くぞ。ある意味野田より面倒くさい。信二がそう思っていると学校のチャイムが鳴った。

「やべっ！遅刻するぞ！」

信二はそう叫んで走った。

「走るのか！よし！負けんぞ！」

野田が競争するかのように走った

「2人と。待って！」

和真がそういつて走った

2年2組の教室

「3人共、遅刻よ」

生徒会長の立花裕香がそう注意した。

「すみませんでした。生徒会長様」

信二が「様」を強調して皮肉っぽく言った。信二と野田は普通に教室へ入ったが和真はかなり息切れしながら入った。信二の席は窓側の一番前。野田は廊下側の一番前。和真は教卓の前だった。

「珍しく遅刻だね」

信二の後ろの席の岡本紘輝が言った

「寝坊だ。まったく学校なんて無ければいいさ」

普段は面倒くさがって答える信二だが紘輝相手だと違う。2人は幼稚園からの親友だったからだ。

朝読の時間が終わった。ここの中学校は朝、本を読書する時間があった。1時間目の授業が始まるまで、まだ時間があった。ふと、信二がそういえばとばかりに自分のバッグをあさった。そして隣の女子に話しかけた。

「前借りたBD返すよ。ソフィー」  
フルレイディスク

そう言つてソフィー・ヴェルネに返した。

「えっ・・・えっと・・・面白かった？その・・・プライベートライアン」

ソフィーは全校生徒の前で発表するかのように緊張して話していた。

「ああ。面白かったぜ。特に最初の20分間のノルマンディー上陸の際の戦闘が」

信二はそういつてさらに

「今週の日曜日空いてない？」

と言った。ソフィーの顔が赤くなった

「なっ何でかな」

「いや、俺と一緒に映画・・・」

言い終わる前にソフィーは「きゃー」と叫びながら教室を出てった。その様子を紘輝は呆れながら見ていた。

「何て言おうとした？」

「いや、俺と一緒に映画見ないかって。BDのお礼に。紘輝もいるぞって。何であいつ出たのかな」

「出て行ってほしくなければ、俺と紘輝と一緒に映画見ないかと言えよ良かったんだ」

紘輝がそう説明すると信二が「何で？」と質問した。

こいつは乙女心を理解していない。紘輝ははつきりそう思った。ソフィーは、トイレに駆け込み、個室に入ってドアを閉めた。胸はまだどきどきしていた。

「2人きりで、映画・・・これってデートだね。特別な関係よね。」

ソフィーはそう考えると、日曜日が楽しみになった。実際はく2人きり>ではないが

教室では、山田が信二たちの所へ行き、

「何してるの。次、社会だよ」と言った。

「来たか。無個性君。」

信二と紘輝が皮肉を言う。

「ひどいな。僕も個性作ろうとがんばってるんだよ。それより、和真君どうしたの？かなり息切れてるよ。」

「ほっとけ」

信二は冷たくそう言った。しばらくあいつのトーク聞かずにすむ。そう思った。

「おい。そろそろ席に着け」

社会担当の黒木大輝先生が素晴らしいながら入ってきた。

「やっぱ大輝先生かっこいいよね」

「ネクタイと制服が似合うよね」

「あのショートヘアの黒髪、鋭い目つき、渋い声」

女子達がひそひそ声で話していた。信二は面倒くさそうに教科書を用意した。

またいつもどおり授業が始まるんだ。

## 異変

「先生方は至急職員室へお集まりください。繰り返します。」  
教頭先生の声だ。

「じゃ、職員室へ行くから席で待ってる。」

黒木大輝はそう言って、教室を出た。その直後1組の竹田優が2組に来た。

「自分の教室へ戻って」

立花裕香が注意したが、竹田がそのまま信二のもとへ寄った。

「信二。何の会議だと思う」

竹田が信二に質問した。信二は答えるのを面倒くさがった。代わりに紘輝が答えた。

「学校閉鎖するんじゃない？俺達の学校は3年と1年は5クラスしかないし、2年は4クラスしかない。」

3年は5組と3組がインフルエンザで学級閉鎖。1年は1組と2組と4組だ。」

信二は学校閉鎖に期待した。そうすれば家でゆっくり眠れる。

「学校閉鎖がいいと思う。ミスター心臓病」

信二はものすごい皮肉を言った。竹田はむっとした。

「ふん！どうせ俺はチビで弱い雑魚ですよ！」

「本気にするなよ。優」

紘輝は言った。すると、スピーカーから

「全校生徒に告げます。すみやかに教室に戻り担任が来るまで待機するように。繰り返します・・・」

それを聞いた立花が「自分の教室に戻って」と冷静な声で言った。

「はいはい。戻ります」

竹田は戻った。本格的に学校閉鎖だな。信二をそう願った。担任の川口先生が来た。

「皆、大事な話だ。よく聞いてくれ。・・・上田は？」

川口先生が上田がいない事に気づいた。

「休みでは？」

ソフィーが答えた。

「いや、連絡を受けていない。あいつのことだから来るはずだが」  
ドアが開く音がした。上田だ。しかし全員上田の姿を見て驚いた。

「血まみれじゃないか！」

川口先生が上田に駆け寄った。顔が下がってて見えないが、首筋に  
噛まれた傷があった。

「やばい！立花、黒木先生を連れて来い！女の方な！」

川口先生が立花に指示を出した。無口の立花はうなずいて駆け足で  
廊下に出た。

「上田、顔を上げる」

川口先生はそう言つて、上田の顔を両手で上げさせた。

上田の顔を見たとき、川口先生は我が目を疑った。上田の目が真っ  
黒だった。さらに口は鮫の如く鋭い歯が並んでいた。そして上田は  
人間が発するとは思えない、怪物的な奇声をあげながら川口先生の  
首筋を噛み付いた。

「ぐわああああああああああ」川口先生は叫びながら上田を  
引き離そうともがいていた。床に倒れた。

「何をする！」

野田はすぐに先生を助けに行った。他の生徒はショックで動けな  
かった。野田は上田の体を後ろから両手で締め付けて、先生から引き  
離れた。それが悪かった。先生の首は引き離れた際に食いちぎられ  
た。

先生の首と口から大量の血が吹き出た。後ろから締め付けられた上  
田は怪物の声をあげながら、もがいていた。生徒たちは生々しい光景  
を見て、大半は吐き気がしていた。

「1人じゃ無理だ。誰か手伝ってくれ！」

野田は叫んだ。そこではつとした、山田、紘輝、信二、和真が上田  
を押さえに行った。そこへ、黒木百合や他の先生を連れて、立花が

戻ってきた。全員、怪物のような上田の姿と瀕死の川口先生を見て驚愕したが、すぐに上田を取り押さえた。

「川口先生を保健室へ連れて行ってください」黒木百合は先生達を指示した。

「上田を拘束しよう」黒木大輝は言った。中村先生がガムテープを持ってきた。そして上田の両手両足を巻きつけた。先生達は拘束された上田を別の部屋へ川口先生を保健室は連れて行った。

教室は生徒のみが残った。全員、人生で初めて、本物の恐怖を感じた。放心状態の者が多い。信二ははつきりと今までの光景を目に焼き付けていた。ありえない。人が人を食うなんて。まるでゾンビ映画だ。ゾンビ映画をたくさん作るアメリカではなく、日本でこんな事件」が起きるなんて。信二は皮肉を感じた。

異変（後書き）

犠牲者

生徒：なし

職員：川口

## 封鎖

信二はまだ、数分前の出来事を信じられなかった。クラスメートの上田が担任の川口を、食い殺そうとしたからだ。恐ろしい現実だ。黒木大輝が来た

「全員、落ち込んでいるのはわかってる。だが、教室で待機している。」

放心状態から戻ってきた、生徒達の1人が反論した。

「待機って？いつまで待機すればいいんですか！！」

大輝は、相変わらず冷静な口調で答えた。

「俺がいいと言うまでだ」

全員、不満は持ったが、これ以上反論しても無駄だと悟ったか、大輝が「いい」と言うまで、待つことにした。

「せ・先生、川口先生は？」

ソフィーが質問した。

「かなりの重症だ。助かるかはわからん」

そう返答された。

信二は、しばらく寝ようと思った。しかし、ヘリコプターの飛んでいる音がするせいで、寝付けなかった。そういえば、いつもより近くに聞こえる。そんな事を気にするのは俺くらいか。ふと、大輝を見た。大輝が何かを待っているのか、妙にそわそわしている。廊下で誰か走っている。そう感じたとき、ドアが開いた。全員、ドアを開けた人物の顔を見て驚愕された。川口だった。瀕死の川口が、北校舎の保健室から、南校舎の二階のこの教室まで、歩いてきたのか！？川口は大輝に襲い掛かった。その瞬間、生徒達全員、パニックになり、我先に外へ逃げようと廊下へ出て行った。信二も出ようと思ったが、大輝を助けようと考え直した。

しかし、大輝は川口のあごと後頭部をつかんだ。骨が折れる音がした。

大輝が川口の首を、一回転させて折った。骨が飛び出し、血が吹き出た。信二は、川口が二度、死を迎えたと思えた。ソフィーと野田が戻ってきた。

「信二、早く外へ・・・」

2人とも、川口の死体を見て絶句した。ソフィーは再び、吐き気に襲われた。大輝は川口の顔を確認した。信二は、何だと思い、覗いてみると、再び驚愕した。

川口の目が、真っ黒に染まっていた。歯は、鮫のように鋭かった。まるで、上田のようだった。信二は、もうこんな所にいらなかった。ソフィーと野田を連れて、生徒用の玄関に向かった。生徒の群集が玄関の前にいた。信二は、そんな群集の中をすり抜けて、外に出ようと思った。

しかし出れなかった。扉が閉まっていた。扉のガラスから外の様子を確認できた。外は警察が辺りを封鎖していた。扉の前には、ガスマスクをした、自衛隊のような格好をした人たちがいた。自衛隊と違って、迷彩服ではなく、黒い服からして、警察の特殊部隊か機動隊だろう。だが、何よりも信じられないのが、彼らの手に、短機関銃を持っていた。

「日本仕様のH&K MP5だよ」

いつの間にか、隣に鳥円がいた。あの短機関銃はMP5と言っのか。それなら、あのガスマスク兵士のことも知ってるかも。

「彼らは何だ？」

「特殊急襲部隊SATだよ」

鳥円の声は、苛立ちや恐怖よりも興奮に満ちていた。本物の特殊部隊を見れて、嬉しいのか。SATか。アメリカのSWATスワットに当たる部隊かな。こいつの軍事オタクの知識は馬鹿にできないな。信二は、鳥円にある質問をする事にした。本当の答えを知るはずは無いが、意見は聞きたい。

「あいつらの目的は？」

「あの行動は、僕達を隔離しようとしてるんだ。」

隔離か・・・

「何のために？」

「きつと、未知のウイルスがこの学校に流行してるんだ」

未知のウイルスと来ましたか。声が興奮気味だな。やっぱりオタクだ。

信二は、ベランダから、外へ出れるかもしれないと思った。信二たちの校舎の全ての教室には、ベランダがある。信二は急いで階段を駆け上がり、自分達の教室に着いた。しかしすでに、ベランダにSATがいた。彼らはベランダの窓を溶接していた。溶接されたら開けられないな。けど、割って出ればいい。

しかし、SATは、ベランダの窓ガラスくらいの大サイズの鉄板を、窓ガラスに、はめた。何をするかと思うと、鉄板を溶接し始めた。なるほど、窓を割らせないためか。信二は、廊下の窓を見た。廊下の窓でも、ロープにぶら下がったSATがベランダと同じように、窓を溶接し、鉄板を取り付けた。まさかと思い、玄関に向かうと、玄関の窓ガラスにも鉄板を取り付けようとしていた。

「扉から離れてください。これは警告です。扉から離れてください。発砲許可が下りている。すみやかに扉から離れてください。場合によっては発砲します。」

SATが呼びかけをしている。しかし、誰も本気にしていない。それどころか、全員怒鳴って反論している。ソフィーはフランス語で怒鳴っていた。信二はソフィー、鳥円、野田、山田、紘輝、竹田を見つけると、すぐに集めて扉から離れさせた。

「信二、まさかあいつらの言っていること信じたのか!？」

野田の怒鳴り声は迫力があつた。

「嘘を言ってるようには見えない」

学校中の窓をふさいでるんだ。きつと発砲する。そう確信していた。信二が野田たちを説得している最中、どこかの生徒が椅子をもって、ガラスを割ろうとしていた。

その時だった。

他の生徒1人が、突然苦しみ出した。そして、床に倒れた。他の生徒は反論に夢中で気が付いてなかった。信二は、その生徒を見ていた。外ではSATの呼びかけが続いていた。この口論が長続きすると思われた。だが、この口論は1人の生徒の叫び声で中断した。

なんと、床に倒れて死んでいたと思われた生徒が、他の生徒の首を噛み付いていた。そして食いちぎった。信二はしっかり見ていた。殺人鬼と化した生徒の瞳が真っ赤に染まっていた。その生徒は、奇声を上げながら、周りの生徒に血を吹きかけた。生徒達が悲鳴を上げていると、5発の銃声が鳴り響いた。

外のSAT隊員の1人が、殺人鬼と化した生徒に、単発のMP5を発砲した。5発の弾丸が生徒の体を貫いた。他の生徒達は、パニックになり、ばらばらに逃げていった。その間にSATは、玄関の扉のガラスに鉄板を取り付けた。

信二は、射殺された生徒に駆け寄りもう1度、瞳の色を確認した。やはり真っ赤だ。上田や川口は、目全体が真っ黒に染まっていた。しかしこの生徒は瞳だけが真っ赤に染まっていた。歯も確認した。鋭くない。普通の歯だ。

SATによって学校の全ての窓がふさがれた。生徒達は、自分達の教室に戻り、落ち着きを取り戻そうとした。信二は頭が混乱していた。黒眼の上田達。赤眼の生徒。SAT。この学校に何が起きているんだ？

封鎖（後書き）

犠牲者

生徒：2名

職員：川口

## それぞれの感情（前書き）

### 追加登場人物

水谷達也（みずたに たつや）・・・SAT封鎖部隊隊長。冷静な性格。

石神哲也（いしがみてつや）・・・SAT封鎖部隊副隊長。隊長同様冷静。

火野勇也（ひのゆうや）・・・SAT封鎖部隊隊員。大柄の男。同じ名前の息子が、

学校内にいる。

木馬将也（もへば しょうや）・・・SAT封鎖部隊隊員。今回の封鎖に疑問を持つ。

森泉健勝（もりいずみけんしょう）・・・SAT現場責任者。元陸上自衛隊。

瀬木一郎（せきいちろう）・・・SAT狙撃手。南校舎の屋上にいる。

相沢信一（あいざわしんいち）・・・SAT狙撃手。北校舎にいる。信二の兄。

野村たけし（のむら たけし）・・・今回の任務に呼ばれた専門家

## それぞれの感情

何かがおかしい。

大羽中学校南校舎の木馬将也は、隣にいる同じ部隊の火野勇也のぎこちない態度から、不安を抱いていると察した。今回の任務のために、手当たりしだいS A T隊員が集められて、自分達の部隊は、封鎖部隊に任命された。封鎖は成功した。学校中の窓を溶接し、鉄板をガラス部分に取り付けた。なのにどうして警戒心がうずくのだろう。

明らかにおかしい。

水谷達也隊長は普段通り冷静だ。火野は、学校内に同じ名前の息子がいるから、不安を抱いてもおかしくない。

おかしいのは、副隊長の石神哲也と現場責任者の森泉健勝だ。

副隊長は出勤前とは、明らかに別人のようだ。普段は隊長以上に冷静なのに、出勤したとたん落ち着きを無くしている。

現場責任者の森泉は、学校のグラウンドにテントを張り、そこで指示を出している。それはおかしくない。だが、射殺命令はおかしい。暴れだした生徒、職員は即時射殺なんて変だ。先程、他の生徒を襲った生徒を射殺してしまった。酷い事をした。もう1つおかしい事と言えば、屋上の狙撃手スナイパーの配備だ。鉄板が張り付いているせいで、中の様子は確認できないし、狙撃なんて不可能だ。窓は溶接しているから、開閉はできないし、ガラスに鉄板をつけたから、割るのも無理だ。誰も出て来れない。なのに、なぜ狙撃手が配備され、他の隊員は武装警備させるのだろうか。分からない。

だが何よりも腹立たしい事は、何の情報もくれない事だ。封鎖する理由も教えてくれない。与えられた情報は、専門家と自衛隊が来ることだけ。一体、何の専門家が来るんだ。なぜ自衛隊が来るんだ。ここには、S A Tだけじゃない。地元警察や消防隊も来ている。その上自衛隊まで来るなんて。

SATは、与えられた任務を遂行すればいい。木馬は自分にそう言い聞かせた。だが学校内の様子が気になっていた。できれば、生徒達を外に出してやりたい。

木馬と同じ気持ちの人物が、もう1人いた。北校舎に配備された狙撃手、相沢信一だ。学校内に閉じ込められている信二の10歳年が離れている実の兄だ。

信一は、中に入りたくてしょうがなかった。弟の信二を外に出したかった。だが、屋上の出入り口のドアは、別の隊員が配置されていた。こっそり中に入るのは不可能だ。

相沢家の男は代々、立派な職についていた。信一はSAT。信一と信二の父親信也は、陸上自衛隊だ。祖父は海上自衛隊。曾祖父は大日本帝国陸軍に入っていた。だから、信二にも、警察や自衛隊に入ってもらおうと指導したが、信二は別の職につきたがっていて、そのことが口論になり、それ以来仲違いしたままだ。

だが、いくら仲違いした弟でも、心配でたまらなかった。弟の安否を確認したい。自衛隊が来る前に、なんとかしても校内に入らなければ。場合によっては、ドアの前の隊員を殴り倒すまでさ。

現場責任者の森泉は、苛立ってしょうがなかった。上層部からの情報が少なすぎる。必要最低限の情報しか与えられていない。<ウイルス>が学校内に流行している。学校外に感染者を出さないため、学校を封鎖せよ。ふざけた話だ。ウイルスが、病院でも研究所でもなく、よりにもよって学校に流行している。

たいした情報も与えられぬまま封鎖し、生徒1人を射殺した。だが1番腹立たしいのは、一体何の<感染>か教えてもらえない。専門家が来るからそいつに教えてもらえと言われた。だが専門家は自衛隊と来る。自衛隊がくれば俺達SATは即時撤退しなければならぬ。何も知らずに撤退するのか。結局上層部にとって、俺達現場の人間は駒でしかない。まったく、いい身分なことだ。時代はいつ

までたつても、身分に縛られているな。

南校舎に配備された狙撃手の瀬木一郎は、信一の行動に疑問を持った。なぜさつきからドアをちら見する？校内に入る気か？いや、あいつに限ってそんな事は無い。とにかく、任務に集中しよう。

専門家の野村たけしは、自衛隊のヘリコプターに乗っていた。自分以外の搭乗者は皆ガスマスクをつけていた。

「マスクを付けないのですか？博士」

自衛隊の1人から話しかけられた。確かに、口全体を隠せるくらいのガスマスクをもらった。他の連中のマスクは、顔全体を隠せる大きさだ。そのため表情が見えない。

「マスクは付ける必要ない」

そう答えておこう

「なぜですか？」

なぜですか・・・か。馬鹿馬鹿しい質問だ。

「必要ない」

そう答えようと思った矢先に

「一体何の感染ですか？」

と他の隊員から質問された。答えたくない質問だ。

「それは、着いてから話す。今は話したくない」

しかし、まさか<アレ>が流行するとは思っても寄らなかった。<病院>での流行は防げたが、はたして今回はどうだろうか。<アレ>はこの世で最も厄介なウイルスだ。どんな手を使ってもでも大流行を防がなくては。今度こそ見つかるだろうか。<彼女>が・・・

## それぞれの感情（後書き）

黒木大輝は、職員室に座っていた。

「温かい飲み物でも飲んだら？あなた」

妻の百合がそう言っつて紅茶を机に置いてくれた。百合の声は滑らかな甘い声だ

「ありがと」そう答えよう。

紅茶を口にゆつくり飲んだ。相変わらず、百合の入れる紅茶はおいしい。疲れた時の特効薬だ。

「ちよつと、図書室へ行つて来る。」

そう言つて、大輝は職員室を出ていった。職員室は廊下の奥にある。その向かい側の奥に図書室があつた。ドアの鍵を開け、図書室の隅にある部屋に入った。

資料室だ。資料室にたくさん資料があつたが、大輝はどれにも興味が無かつた。隅に鍵のかかつた箱があつた。この箱が目的だつた。鍵は大輝が持つていた。鍵を開け、箱を開けた。中にはたくさん資料があつた。その資料の中に、携帯ゲーム機PSPくらいの大きさの箱があつた。大輝はそれを、ズボンのポケットにしまった。資料の中にあるファイルを取つた。ファイルは厚かつた。ファイルを開いた。そのファイルの中に1人の少女が写つていた。

「また、お前が原因になるとはな・・・」

大輝の声に悲しみが混じつていた。ファイルから、1枚の資料が落ちた。

その資料に大きく太字で書かれてた名前があつた。

< DEMONYO デモニーヨ VIRUS ウイルス >

## 七不思議と8番目

自分達の教室に戻った信二は、射殺された生徒の事が、頭から離れなかった。

なぜ、次々と人が異変するのだろうか。隣のソフィーはフランス語で何か言っている。後ろの絃輝は、ネックレスの十字架を握って祈りの言葉を呟いている。山田は何かゲームをしている。鳥円は最新型のノートパソコンで、自分のブログを更新している。野田は腕立て伏せをしている。立花は読書をしている。皆それぞれ、何かに夢中になることで、今朝の出来事を忘れようとしている。なら俺も何かしよう。大羽中学校の七不思議は確か

1：トイレの次郎さん

2：変態チカン幽霊

3：同性愛者の呪い

4：恐怖の追跡者

5：ゴジラの逆襲

6：悪魔の叫び声

7：7月7日7時の幸福

だったな。

うちの学校の七不思議、ろくなのがない。1：トイレの次郎さんって何だよ。花子さんじゃないの？著作権にかかったのか？

2：変態チカン幽霊って何だよ？チカンは怖いけど、チカンの幽霊って・・・

3：同性愛者の呪い。呪いは怖いけど同性愛者はいららないな。

4：恐怖の追跡者って昔のB級映画の題名っぽい

5：ゴジラの逆襲って、七不思議でも何でもねーよ！

6：悪魔の叫び声。一番まともだな。

7：7月7日7時の幸福・・・幸福ねえ！

6の悪魔の叫び声って何だろう？鳥円に聞いてみるか。

信二は席を立ち、鳥円の席に向かった。

「なあ。悪魔の叫び声って何だ？」

鳥円はタイピングをやめ、信二の顔を見た。

「信二君。君の知っている七不思議はデマだよ」

デマだって！？おかしいとは思ったけど、まさかデマだったとは・

・  
「これが本物。」

そういつて、パソコンの画面を見せてきた。

- 1：傲慢の悲劇
- 2：嫉妬の不幸
- 3：憤怒の恐怖
- 4：怠惰の後悔
- 5：強欲の結末
- 6：暴食の結果
- 7：色欲の惨劇

さつきと格が違うな。

「これって、何だ？」

鳥円が説明を始めた。

「この学校で、この7つの感情や行動をしてしまうと、それぞれの悪魔に魂を持ってかれるというものです。キリスト教の<7つの大罪>と酷似してますね」

本当にこいつ物知りだな。

信二がそう関心していると、突然鳥円が、クリックをした。

「実はこの学校の七不思議はこれだけではないんです」

どういう意味だ？七番目で終わりじゃないのか？

「うちの学校の七不思議には<8番目>があるんです」

その言葉を聞いたとき、背筋が凍りついたような感覚に襲われた。

「これが8番目です」

## 8：アイビの呪い

アイビの呪い？

「アイビって何だ？」

「この学校にもともと住み着く怪物の名前と言われています。」  
学校に住み着く魔物？

「もともと、この学校には校則違反した生徒を罰するための部屋があつたんです。その罰とは、その部屋に生徒を1時間以上閉じ込めるんです。」

酷い部屋だ。

「しかし、ある時その部屋で、生徒が1人心臓発作で無くなったそうです。その部屋は、しばらく物置として使われたんですが、ある日、少女が苦しむ声が、その部屋から聞こえると生徒の間で噂になり、職員の何人かも、その声が聞こえた。そこで、若い職員がその部屋を調査しました。」

信二は息を飲んだ。

「それで・・・」

「1時間以上その職員が戻って来ないので、別の職員がその部屋に入りました。また30分以上戻って来ないから、職員全員がその部屋に入りました。その部屋では、最初に入った職員が虐殺死体で見られました。2番目に入った職員は、行方不明になってので職員達はその部屋を封印しました。この時の職員全員、別の学校に転勤したのでその部屋の場所を知る人は居なくなりました。」

怖い話だ

「数年後、ある職員が、深夜のパトロールでこの学校中を徘徊しました。翌日、その職員は、別の職員に職員室の隅っこで怯えている姿で見られました。その職員は「鎖の化け物」としか呟かず、精神病院行きになりました。以後、生徒達はこの事をアイビの呪いと噂され、全員鎖の怪物を恐れました」

なるほど、そういう伝説があったのか

「で、アイビはどこから来た？」

「心臓発作で亡くなった生徒の名前のあだ名が愛美だったそうです」  
そういうことか。信二が何かを言おうと思った瞬間、扉が開いた。

黒木大輝が戻ってきた

「全員聞いてくれ。大事な話がある。」

大輝の深刻そうな顔が、生徒の不安をより高める。  
話って何だろう・・・信二はそう思った。

「ここで何が起きてるか話そう。」

大輝の口から、真実が語られようとしていた。

## 真実

「皆に真実を話そう。」

大輝の言う真実に、信二は理解しにくかった。ただの社会の先生が一体何を話そうと言っただ。

「先生・・・真実って、何を話すんですか？」  
ソフィーが質問した。

「全部だ。なぜSAT部隊が学校を封鎖するのか。なぜ変貌する生徒がいるか。七不思議の8番目もだ。」

信二は耳を疑った。七不思議の8番目については、さっき鳥円から聞いたばかりだが、明らかに先生とは無関係だ。頭がおかしくなったのか！？

クラスメート全員、七不思議の8番目と今回の事件がどう関与するか疑問に抱いた。

「SATがこの学校を封鎖するには理由がある。それは未知のウイルスがこの学校を汚染しているからだ。」

この言葉に半信半疑の者もいれば、あざ笑う者もいる。鳥円だけがこの言葉を信じたようだ。

「未知のウイルスって・・・一体何のウイルスだよ！！」怒りがこみ上げた生徒が反発した。

「そうですよ！感染者はどういう症状が出るんですか！」

「単純な感染とは違う」

違うって、どう違うんだ！信二はそう思った。

「じゃあ証拠を見せろよ！感染者と症状を！」

「＜感染者＞ならすでに見ているはずだ」大輝はそう答えた。

信二には該当する人物がいた。

「それって、上田と川口先生ですか？」信二は質問してみた。

「そうだ。上田と川口・・・彼らが＜感染者＞だ」

信二以外の生徒は全員、ショックが大きかった。

「上田と川口先生は昨日まで何ともなかった。なのに、なぜ」立花の冷静な声が響いた。

「言っただろ。単純な感染とは違う」

「じゃあ・・・い・・・一体なんのウイルスですか？」ソフィーが怯えた声で質問した。

「それを説明するには、12年前にさかのぼる必要がある。俺の過去をな」

信二は、大輝の過去には興味ないが、ウイルスの正体には、興味があった。

「当時俺は教師ではなく、生物学者だった。相棒に、野村たけしつて同じ生物学者がいた。俺と野村はフィリピンに滞在中だった。そ

の時、ある少女の噂を耳にした。〈本物の悪魔〉に取り付かれた少女の噂を」

悪魔と来ましたか。

「これが、その少女だ。当時は7歳か8歳だった」

先生は写真を見せた。信二はフィリピン系の女性は嫌いだが、見せられた写真の人物は思わず見とれてしまう美しさがあつた。

「だが、取り付かれた後はこれだ」

信二は目を疑った。少女の眼は真っ黒に染っていて、瞳の部分は真っ赤だった。歯は、猛獣のようで、手足の爪も獣のようだった。血管も出ていて、背中から、骨らしき鋭い突起が4本出ていた。

「当然、少女は悪魔被いを受けたが、効果は無かった。俺達も少女を实际見たときは驚きを隠せなかった。だが、そこで野村は思いついた。少女は、未知のウイルスに感染していて、体の細胞が変異し、ああなつたと。俺達はすぐに日本にいる研究チームを呼び、フィリピンの研究所で少女を研究した。」

「それで……」

「少女の血液と唾液から、未知のウイルスが検出された。」

「ど……どんなウイルスですか……」

「RNAウイルス、〈デモニヨDemonyoウイルスVirusa〉。感染者のDNAと細胞を変異させ、身体能力を野生の動物レベル以上に進化さ

せる。代償として、知能が急激に低下する。」

「デモニーヨ？」信二はデモニーヨの意味が分からなかった。

「タガログ語で<悪霊>という意味だ」

「俺は一刻も早く抗ウイルス剤を開発し、少女を治してあげたかった。だが、そんな時だった。事件が発生したのは」

### 3つの悪霊

「事件？」

信二は、どんな事件が起こったか興味心身だった。

「俺達の研究チームは4つの意見に対立していた。新種ウイルスを生物兵器として利用しようとする一派、新種ウイルスの第1感染者の少女を殺害し、ウイルスを消し去ろうとする一派、新種ウイルスを政府に売ることで、生物学界に名を残そうとする一派、抗ウイルス剤を開発して少女を助けようとする一派の4つにな。」

「それで・・・」

「俺と野村は少女を隠し、4番目の一派と共に秘密裏に研究を行った。だが、試作段階の抗ウイルス剤を少女に投与すると、体内のウイルスが突然変異を起こし、3種類に分かれてしまった。1種類目はオリジナルで毒性が強く、少女以外は耐えられなかった。2種類目は、感染者の思考回路を、オリジナルの感染者である少女を守る護衛のような者にするくデモ―ニョウイルス・タイプ2。タイプ2の感染者の外見は、真っ黒に染まった眼、鮫のような歯だ。」

川口と上田はタイプ2の感染者だったのか・・・

「3種類目は、感染者に殺人衝動を引き起こし、殺戮を繰り返す怪物にさせるタイプ3だ。感染者の外見は、瞳だけが赤くなる。」

射殺された生徒がタイプ3だったのか。

「フィリピンの研究所では、資材と設備が不足していると思った俺は、日本の研究所に連れて行こうとした。その時だった。3つの一

派が俺達一派の研究所を襲撃し、少女を奪おうとした。」

「そ……それでどうなったんですか？」ソフィーが質問した。

「俺は殺されそうになった。だが、少女が、敵の一派達を襲い始めた。さらに、タイプ2と3がもれて俺の一派に感染し、少女を守るうとするタイプ2の感染者と攻撃的になったタイプ3の感染者が敵の一派を返り討ちにした。地獄だったよ。人が人を殺すのだから。俺と野村は、少女とそれぞれのサンプルを持って、研究所から脱出し、研究所を焼きはらったよ……」

そんな過去を持っていたのか……

「俺は、3種類のサンプルを野村に渡し、少女を連れて日本に連れて帰り、ある場所に来た。それがこの学校だ。」

全員驚愕した。

## 8 番目の真実

「先生が・・・先生が少女ををこの学校に連れてきたのですか？」  
信二が質問したかった事を代わりにソフィーが質問した。大輝が学校に少女を連れてきた・・・だが、少女はどこにいるんだ。

「ああ。もともとの学校は、研究所として建てる予定だった。だが予定を変更して学校に変えた。」

「学校に変えた？一体誰が？」

「俺だ。俺が設計を依頼し、資金を出した。少女のウイルスをより確実に研究するために。だが、この研究は人目を引くものだった。誰にも注目されずに研究する必要があった。研究所では、周囲の人々に注目されるリスクがあった。だが、研究所以外の何かの施設なら、注目される確率が減る。その結果、学校にした。学校なら、注目もされないし、たとえ生徒の誰かが、この研究を知ってしまった誰かに話しても、本気にされないだろう。」

だが、この話に1つ疑問があった。

「じゃあ、なぜ12年間この学校にいられた？」

「俺は、正式な教師じゃないからな。それに、この学校の校長も事情を知って協力的だよ。」

信二はもう1つ疑問があった。

「どこで、研究してた？それらしい教室は無かったぞ」

「秘密の入り口があつてな、地下2階まで続いている。つまり、研究所はこの教室の地下にある。」

最後の質問をしよう・・・

「資金はどうした？自腹か？それとも誰かが出しているのか？」

「資金は教皇庁が出している。」

「教皇だつて？ローマ教皇の教皇か？つまり資金はバチカンが出しているのか？」

「説得は簡単だつたよ。悪魔に取り付かれた人間の状態を調査し研究する絶好の機会だと。原因となる化学物質を特定できれば、解毒剤を開発し、悪魔から人々を救えると」

頭の中が混乱した。悪魔？ウイルス？教皇庁？解毒剤？学校の地下研究所？とにかく、とんでもないことが起きている事だけは、理解できた。

「だが、少女の存在も長くは隠せなかった。ある日、少女は研究室を脱走し学校内を彷徨っていた。それをたまたま見回りの職員が発見したさ。その職員は精神崩壊を起こした。焦った俺は、七不思議の8番目を作つて、生徒に吹き込んだ。それがくアイビの呪いさ。」

「なぜ、アイビ？」

「少女の名前がアイビだったからさ。」

「そして昨日、恐れていた事態が起こった。デモーニョウイルス・タイプ2・タイプ3が何匹かのネズミの体に付着して、ネズミは何人かの生徒に接触した。ネズミに接触された生徒はその時点で感染し、今日発症した。」

そういう事だったのか。全ては、フィリピン人少女「アイビ」が原因だったのか。じゃあ、アイビはこの学校の地下にまだ潜んでいるのか。

## 第4の感染者（前書き）

追加登場人物

栗山・・・3年生最初の感染者

## 第4の感染者

3年2組の栗山は、朝から頭痛がしてたまらなかった。朝はたいしたこと無かったが、だんだん酷くなっていく。今は、あまりの激痛に頭が割れそうだ。昨日ネズミを触ったな。あれが原因かな・・・  
「どうした栗山？顔色悪いぞ」

「へ・・・平気です。」  
そう答えたが、やはり激痛だ。吐き気までしてきた。

「どうしたの・・・調子悪そうだよ」隣の女子が話しかけてきた。  
「だから、へい・・・」

言い終える前に嘔吐してしまった。その瞬間全員悲鳴を上げた。皆大げさすぎる。確かに下品だがゲロを吐いたくらいで悲鳴は・・・  
栗山は自分の排出物を見て、驚愕した。

血だった。血を吐いたのだ。  
「栗山！どうした」

担任が駆け寄った。栗山は頭痛がさらに酷くなった。病院に行きたい。栗山はそう思った。だが、その時。栗山の全身に苦痛が走った。栗山は床に倒れた。全身の筋肉が硬直した。体が本人の意識関係なく立ち上がり、黒板にたたきつけられた。体が勝手に動く。栗山は止めれと必死に思ったが、体を命令を聞かなかった。口から大量の唾液が出てきた。再び血を吐いた。栗山は、自分の顔を鏡で見た。瞳が赤くなっていた。

「栗山どうした！」  
担任が栗山の体を抑えた。栗山の体が、栗山の制御下に戻った。栗山は安心し、担任の顔を見た。

その瞬間、あるく感情>が沸いてきた。  
栗山の思考は、<殺意>に支配された。先生を殺したい・・・これが彼の最後の意識だった。



## 乱闘

「騒ぎが無いな。感染者はもつけないのか？」

野田はそう言った。大輝が真実を話してから、かなり時間が経つ。大輝は職員達に真実を話しに言った。

「さあな」信二はデジタル時計に目を走らせる。午後1時23分。まだ昼過ぎだった。鉄板が、学校中の窓に張り付いているせいで、光が遮られて、校内は夜のように暗い。

「とりあえず、弁当でも食うか。」

信二はそう言つて、自分のリュックから、弁当箱を取り出した。

「信二・・・よくこの状況で食べれるね・・・」隣のソフィーに呆れ声で言われた。

「だって、腹減つたから」

「信二つて、緊張感な・・・」ソフィーが言い終える前に、腹が鳴つた。

「お前だって、腹減つてるじゃん。弁当食べ。」

「仕方がないかな・・・」ソフィーはそう言つて、自分のリュックから弁当箱・・・ではなくカロリーメイトのチョコ味を出した。

「弁当それだけかよ！」

「仕方ないじゃん！ダイエット中だもん」ソフィーはむきになっていた。

ダイエットしなくても、十分痩せているのに・・・それ以上痩せたらガリガリのゾンビになつちゃうじゃないか。仕方ない

「ほらよ」信二は、自分の弁当を差し出した。

「えっ？いいよ！ダイエット中だから」ソフィーは断ろうとした。

「食べないダイエットは効率に悪い。食べたカロリー以上のカロリーを消費するのがいい」

「じゃ・・・じゃあ一口だけ・・・」

ソフィーはそう言つて、鳥の唐揚げを1つ取つて、口の中にほうり

投げた。

「おっ・・・おいしい！」

信二の唐揚げは、食感と舌触りは良く、とても美味しかった。

「じゃあ、カロリーメイトと交換だ」

そう言つて、信二は、自分の弁当とカロリーメイトを交換した。

「冷凍食品なの？」

「いや、全部手作りだ。冷凍は嫌いだ。」

「お母さんが作ってるの？」

「自分で、作っている。母さんは、とくに他界していて、父さんは自衛隊、兄さんは警察に入ってるから、いつも家は1人の時が多い。」

ソフィーは、まずい事を聞いてしまったような気がした。だが、信二の気持ちは誰よりも理解できた。

ソフィーも家では、1人であることが多い。ソフィーは、信二が運命の人ではないかと思った。

紘輝は、信二とソフィーのやり取りを見ていた。

いいな、彼女がいる人は・・・俺も彼女欲しい！そのとき、スピーカーから、音声が届こえた。

『職員の方々は、至急3年2組に急行して下さい。繰り返します。職員の方々は、至急3年2組に急行して下さい』

信二ははつとした。3年2組に何かあったのだ。信二はすぐに、3年2組に向かった。

「待てよ！信二」

野田と鳥田と山田が後に続いた。

「まっ・・・待って！」

ソフィーは信二から貰った弁当を持って後を追った。

「教室に戻って」

立花は、信二たちを連れ戻そうと、追った。紘輝も行こうと思った

が、嫌な気配を感じたのか、部活で使う金属バットを持って信二たちを追った。そんな彼らの後をこっそり付いていく人物がいた。

――3年2組教室前――

3年2組の教室では、乱闘が起きていた。生徒達が争っていた。職員達は生徒達を取り押さえようとしていた。

信二たちは着いた。3年生の生徒達の乱闘を観察した。ところどころ、瞳が赤い生徒がいた。

間違えない。感染者だった。男性感染者の1人が信二の襲い掛かった。信二は、感染者を殴りつけた。殴られた感染者は、今度はソフィーに襲い掛かった。弁当を持っていて手が使えないソフィーは、反射的に、股間を蹴り上げた。感染者は、そのまま倒れ、痙攣を起こしたような仕草をしていた。感染した後も、男の急所は変わらないのか・・・よくやったソフィー。信二は内心そう思った。その時、信二を後ろから感染者が、襲ってきた。やばい！噛まれる！そう思った瞬間、野田が感染者にタックルし、信二を助けた。

「サンキュー野田」

さらに、鳥円、山田も加勢した。

立花も信二たちの追いついた。だが、そこで起きている乱闘に、シヨックを受けた。感染者の1人が立花を襲ってきた。立花は、それを避けたが、別の感染者が両手で立花の首を絞めた。助けを呼ぼうとしても、うめき声しか出なかった。立花は口を大きく開けて、必死に息をしようとした。だが、感染者は凄まじい力で、首を絞めあげた。意識が薄れてきた。立花は、自分の人生の終わりを感じた。

絃輝が着いた。信二たちや、3年生、職員が感染者と乱闘している。自分も加勢しようとしたが、立花が感染者に首を絞められている。助けなければ。そう思った。だが、別の感染者が絃輝に襲い掛かった。絃輝を素手で殴った。だが、感染者は怯んだ程度で、また

襲ってきた。絃輝は、拳、手刀、ヒジ、ヒザで感染者を殴り続けたが、猛攻は止まらなかった。この間にも立花が危ない・・・相手は自分を殺そうしている。正当防衛だ

「神よ。我に力をお与えください」

絃輝は、金属バットに力を入れて、感染者の頭に思いっきり殴った。感染者は倒れ、動かなくなった。

「私の罪をお許してください」

絃輝は立花を絞めている感染者の後頭部をバットで力一杯殴った。頭蓋骨が砕け、肉片が飛び散った。

絃輝はすぐ、倒れている立花に駆け寄った。

「大丈夫か!？」

返事がない。

「しっかりしろ!」

返事がない

絃輝は、ある事を思いついた。ためらっている暇はない。人命がかかってるんだ。

絃輝は空気を一杯吸った。そして、人工呼吸を行った。何秒たったのだろう。何時間にも感じる。絃輝は、何度も人工呼吸を行った。

立花が咳き込んだ。生きてた!良かった!

だが、安心しているもつかの間、次々と感染者が襲ってきた。絃輝は、立花を自分の後ろに移動させ、金属バットを構えた。

「神よ、私達をお守りください」

## 乱闘（後書き）

屋上の信一はついに決心を決めた。

「校内に入れてくれ」

信一は屋上の出入り口を見張る隊員に頼んだ。

「駄目です。校内への立ち入りは禁止です。命令です」

そう言うと思った。信一は狙撃銃PSG-1で隊員を殴って気絶させた。

「悪く思つな。弟のためだ」

こいつが目を覚ましたら、このドアは溶接される。その前に出なくては。

待っている。信一

## 再開

大輝は、職員室の自分の席から小さな箱を出した。鍵を開け、中から何かを出した。拳銃だった。

PIG / ザウアー P220 だった。感染者は殺すしかない。 < あれ > は一本しかない。誰に使うかが問題だ。

3年2組では、まだ乱闘が起きていた。もはや、数ではタイプ3の感染者が上回った。信二たちや他の非感染者は感染者に囲まれた。

紘輝は、廊下の隅で立花を守りながら、金属バットで襲ってくる感染者を殴り続けた。紘輝達を襲う感染者はいなくなった。代わりに、信二達に集中した。

「立花、すぐに教室に戻れ。」

「でも、あなたは？」

「信二達を助けに行く……」

「でも、感染者がお……」

話が終わる前に、1人の感染者が襲ってきた。

「くそ！」

紘輝を力一杯バットを横に振った。バットは感染者の頭に直撃したが、勢いよく振ったためか、そのまま壁にぶつかり、壊れた。

「くそ！バットが壊れた！」

だが、また1人感染者が襲ってきた。紘輝は、素手で対応するしかなかった。気づけば、立花がいない。教室に戻ったな。紘輝は力一杯感染者の頭を殴った。だが、バットより威力は、遥かに劣っていた。感染者は、紘輝の顔を両手でつかんで、噛み付こうとした。紘輝も感染者の頭を両手でつかんで、遠ざけようとした。だが、ずっとバットで戦って体力を消耗しきっていたため、段々、感染者の顔が近づいてきた。このままでは噛み付かれる。もう駄目だ！もたな

い！  
「神よ、ご慈悲を…」

何かが刺さる音がした。噛み付かれたのか…いや痛みはない。ゆつくり目を開けた。

感染者の背中に包丁が刺さっていた。その後ろには立花が居た。立花か！立花が感染者を包丁で刺したのか。

「どこで、その包丁を？」

「後ろをみて…」

言われた通りに、後ろを見た。家庭科調理室だ。調理室から包丁を取ったのか。

「でも、ドアには錠前がかかっているはずだが？」

「消火器で壊した…」

さすがは生徒会長。頭が働くな。よく見れば、立花の足元に消火器があった。

「これを」

そう言つて、もう一本の包丁を渡してきた。俺の分も取つてくれたのか。気前がいい。

「だが、包丁は予備にしとくよ」

そう言つて、紘輝は包丁をベルトに挟んだ。

「こいつをメインにしよう」

消火器を拾った。すると、階段の上から誰かが降りてくる音がする。紘輝は消火器を、立花は包丁を構えた。音の主が姿を現した。

信二達は囲まれていた。もはややばいな。感染者が信二に全力で走ってきた。

だが、銃声と共に、感染者の頭に直撃した。全員、銃声の方に向いた。S A T 隊員が、狙撃銃で感染者を撃つたのだ。信二は、隊員の顔を見て驚いた。

「兄さん！」

感染者のほとんどが、信一の方へ走った。信一は、狙撃銃から、短機関銃に切り替えて、乱射した。

「逃げる！」

信一はそう言つて短機関銃で次々と感染者を撃ち続けた。

「信二！良かったな！兄さんが来てくれて」

紘輝と立花が来た。感染者は今信一に夢中だ。チャンスは今しかない。信二は、他の人を連れて、階段まで逃げた。信二の友人以外は職員6人と生徒4人しかいなかった。残りは感染者になった。階段の下は感染者だらけだ。上に行くしかない。上は確か屋上だったな。

学校の周りには、大勢の野次馬と報道陣に埋め尽くされた。上空には、報道陣のヘリコプターが飛んでいた。

「今、警察と特殊部隊が学校を封鎖。校内の大勢の生徒が閉じ込められています。」レポーターが解説し、カメラマンがカメラで学校を写した。

ヘリのパイロットはマスコミが大嫌いだった。事件の被害者や加害者の気持ちも理解せず、ネタになる事件は、自分達の意見も含めてショーのように放送する。この学校の封鎖も生徒の気持ちを理解しないで「悲劇の生徒達」だの言つて、本当にむかつく。仕事だから仕方ないか。その瞬間、パイロットの全身に激痛が走った。

「パイロットさん。少し運転荒くないですか？」

レポーターが話しかける。パイロットは振り返った。眼が真っ黒だった。パイロットは、運転を手放して、レポーター達に襲い掛かった。制御不能のヘリコプターは、そのまま回転しながら、墜落した。墜落先は……

信二達は、階段を上がって、屋上を目指していた。屋上の入り口が見えた。ドアが開いている！3年生5人が信二を追い越して、先に屋上に出ようとした。その時、ヘリコプターのプロペラ音がした。



「様子が変だ」

確かに感染者達の様子がおかしい。突然、全員が大人しくなった。信二は、奥から、どの感染者よりも、恐ろしい奇声が聞こえた。聞き取れたのは信二だけだった。

突然、感染者が信二の足を放した。

「お…おい、何が起きている？」野田が質問した。

感染者達は、信二達を置いて、どこかに向かった。

「わけがわからないがチャンスだ！全員向こうの校舎に行け！」信一の掛け声と共に全員渡り廊下を渡った。だが、信二は感染者達の後を追おうとした。

「何をしてる？」大輝は、信二の腕を引つ張った。

「先生。今は、襲ってこないような気がします…」

「何を言ってる？奴等は危険だ」

信二は大輝に連れてかれた。

不思議だった。俺だけが聞き取った、あの恐ろしい奇声に、どこか哀しさを感じた。

## 再開（後書き）

学校のどこか。

ある人物が、写真を見ていた。

その写真に写っているのは、信二だった。

## 無線会話（前書き）

### 追加登場人物

伊藤海咲<sup>いとうみさき</sup>・・・2年2組のリーダー的存在の女子。立花と生徒会長選挙で、1票差で負けた。美少女だが、男勝りの根性と精神を持っている。

## 無線会話

信二達の教室は議論が殺到していた。北校舎の感染者の軍団に襲撃されないための対策だった。北校舎の1年生と感染していない職員全員、この校舎に避難していた。

「いつそ、防災シャッターを閉めたら？」

山田が意見をだす。この学校には、渡り廊下も含め、あらゆる所に火災用防災シャッターがある。何人かは賛成した。

「駄目よ。防災シャッターは、火災の発生時にしか作動しないし、それに、制御版は職員室にあるのよ。その職員室は北校舎にあるのよ。つまり、感染者の巣に突入する様な物。」

そう反論してきた伊藤海咲だった。

「じゃあ、アルコールランプで、火災探知機に近づけて強制的に作動するのはどうだ」野田が言った。

「無理よ」と海咲

「無理じゃない！」

「じゃあ、そのランプはどこにあるの？」

野田ははっとした。

「そう。理科室・・・つまり北校舎よ。感染者がうようよしてる。」

「じゃあ！どうしろと言うんだ！」ついに野田がキレた。

「だから、会議しているじゃない」

野田は反論できなかった。

「そんなにシャッターを下ろしたいなら、誰かが北校舎に行ってくればいいけどな。どっかの勇者が」

皮膚・・・だよな？男子に対しての。信二はそう思った。

「じゃあ、俺が行くよ」信二は言ってみた。教室内に笑いが込み上げた。皆。笑いのツボ変だな。

「冗談はよせよ。信二。」「冗談じゃないのに・・・」

「そういうのは、勇者とは言わないは。命知らずの無謀者よ」海咲が言った。さつきは勇者がいればと言ったのに。

「いい？信二君。職員室の制御版でシャッターを下ろしてみなさい？たちまち渡り廊下は閉鎖され、あなたは北校舎に閉じ込められ、感染者の餌食よ。」

確かにそうだ。

「それに、北校舎は屋上を含まないで、6階はあるの。対してこの校舎は4階しかない。渡り廊下は2階と3階しかないの。理科室は6階にあるのよ。まったく感染者と出会わずに無事に帰ってこれる？」

確かに、無理だ。

「じゃあ、大勢で行けばどうだ？」

「誰も行きたがらないわ。職員も含めて全員」  
「勇気が無い連中だ。」

「じゃあ、信一さんに頼んで、屋上に居るSAT隊員に屋上に出してもらえるように説得してもらおうよ」山田の奴、俺の兄貴を利用するのか。

「無理だ。屋上の狙撃手の瀬木は、忠誠心の塊だ。命令に従う男だ。屋上に出てみる？俺ならともかく、お前らは撃ち殺されるのがオチだ」信一は断言した。

その時、信一の無線が鳴った。

『信一、応答しろ！信一』

瀬木の声だった。

「俺だ」

『良かった。無事だったか！お前の所の屋上にへりが墜落したから

心配だったぜ。今何処に？』

「校内だ。」

『馬鹿！周波数を変えろ！』

信一は、周波数を変えた。

『なぜ、校内に居る！？』

「ヘリコプターがやって来るから、やばいと思って校内に逃げたんだ。同じ隊員が下敷きになっちゃったよ。校内に入って正解だったよ」信一は嘘をいった。

しばらく間があった。

『だが、もうすぐ自衛隊が来る。指揮権が自衛隊に移っちゃう。そうしたら、お前本当に出れなくなっちゃうぞ』

「なら、その前に、屋上に出してくれよ」

『じゃあ、早く来い！お前1人くらいなら大丈夫だ。』

「連れもいる。」

『無理だ！非常事態なんだぞ！校内の一般生徒や教師は、感染の疑いがあるから出せない。解ってくれ』

「非常事態なんか、くそ食らえだ。」

『これは、絶対命令だ！連れを連れてみる？俺が撃ち殺すからな。』

1人で来い！連絡はまた後でする』

「瀬木！罪も無い人がどうなってもいいのか！？お前の正義感はどうした？瀬木？瀬木！」

雑音しか流れない。周波数を変えられたな。これだから、忠誠心は面倒だ。信二はそう思った。

瀬木は苦悩した。信一は本当に弟を連れてくる気が。出してやりたいのは山々だが、もし連れて来たら、俺は弟を撃つ羽目になる。頼む……1人で来い。

## 防衛策（前書き）

追加登場人物

栗山仁くりやまじん・・・3年生の栗山の弟。

手野仲てのなか・・・3年生唯一の非感染者。2組出身

## 防衛策

「で、結局どうするのよ？」海咲は皆に聞いた。

「やっぱり、誰かが北校舎に行くしかないな。」野田は言った。

信二は、気分を変えようとテレビをつけた。

「…見てのように、この大羽中学校は警察特殊部隊SATによって大規模な封鎖が行われました。」

全員、テレビに釘付けになった。自分に中学校が映っているからだ。若い女性レポーターが解説を続けている。

「今、まさに校内で大勢の生徒、職員が閉じ込められています。警察側は、封鎖の理由を一切明かしません。」

隠蔽か。

「一説によると、校内にウイルスが流行しているとの事です。専門家に解説してもらいましょう。」

画面の横から、老人が出ていた。いかにも専門家っぽい。

「山羽さん。ウイルス説についてどう思いますか？」

「信憑性が低いですね。まず隊員は窓を溶接しました。大体の人は感染者を外に出さないための工作だと思っでしょう。だが、普通ならあんな事はしません。本当に感染なら、とくに広まっているはずです。それに、感染が学校内に収まっているのは都合が良すぎます。それに人権が…」

うざいおっさんだ。実際に<感染>が広まってるんだよ。

チャンネルを変えても、どの番組もこの学校が報道している。

「…さつき、ヘリコプターが屋上に墜落しました！墜落原因は  
いまだ不明です」

「…一体、何が起きているのでしょうか」

「…感染の疑いがあります」

「…テロの可能性があります」

信二は気を悪くしてテレビを消した。

「で、どうするの？」海咲が聞いた。

「バリケードを作るんだよ」

答えたのは信一だった。

「この校舎の机や椅子で渡り廊下を塞ぐんだ。感染者はこっちに襲撃する際、バリケードに引っかかる。そこを、俺と大輝が銃で狙撃するんだ。」

誰も反論しなかった。大人・・・しかも特殊部隊の意見だ。反論できなйдらう。あれ以上の意見を出す自身が無かったからだ。

「反論が無かったら、すぐに実行だ。」

だが、皆不安だった。紘輝と信一が、何人が感染者を殺害したが、向こうには、まだたくさん感染者が居て、作業中に襲い掛かってくるかもしれない。だが、シャッターを下ろすために北校舎に行くのもリスクが大きすぎる。バリケードを作るしかないか・・・

バリケード作業が始まった。皆、南校舎の机、椅子を運び、渡り廊下にバリケードにし始めた。信一の数人の職員は、見張りに付いている。

信二には、1つ気になることがあった。3年生は、誰から感染が始まったかだ。3年生全員が感染してしまった。だが、幸いにも1人だけ、感染から逃れた生徒がいた。手野という人だ。手野は信二の教室の隅で、怯え続けている。信二は、手野に聞くことにした。

「手野先輩。3年では、誰から感染が始まったか、わかりますか？」手野は怯えるだけで、答えなかった。待っててもしょうがない。作業に戻るか・・・そう思った矢先、手野が怯えきった声で言った。

「栗山だ：栗山から始まった」

「え？」誰かが動揺した。

「兄さんが・・・兄さんが、感染者になったんですか・・・？」栗山仁だ。俺のクラスメイト。

「仁。思い当たる事は無いか？」

「ありません・・・あっ！」

「何かあるのか？」

「そういえば、ネズミを触っちまったとか言っていました。」

なるほど・・・感染ルートはネズミか・・・

「兄さんは、兄さんはどうなりましたか？」

「知らん。見ていない」

信一はそう言っつて、去った。

自衛隊輸送ヘリコプター

「到着までの時間は？」

『およそ10分』

「了解」

野村は興奮してきた。ついに彼女が見つかる！大輝が長年隠し続けた彼女が・・・！この時の野村は1秒が1時間に感じられた。

「ついに完成だな」

渡り廊下のバリケードが完成した。所々に隙間があり、匍匐全身すればすり抜けられるが、連中は走ってくる。絶対に抜けられない。抜けても殺せばいい。

信一は、狙撃銃を構えた。

「全員。武器になるものを持つとけ」

言われた通り。皆武器になるものを携行した。テニスのラケット、彫刻等、バトミントンラケット、サッカーボール、まあ、素手よりは、ましだな。紘輝はどこだ？

紘輝は、この校舎にある美術室で、木造バットに釘を刺していた。なすけて、釘バット。危険極まりない武器だな。

## 自衛隊到着（前書き）

### 追加登場人物

前原健二<sup>まえはらけんじ</sup>・・・陸上自衛隊一等陸佐。現場最高責任者。  
坂田龍<sup>さかたりのゆう</sup>・・・陸上自衛隊二等陸佐。  
新田家摸<sup>しんだかも</sup>・・・陸上自衛隊二等陸曹。医学に堪えている。

## 自衛隊到着

- 学校グラウンド -

不愉快なヘリコプター音だ。森泉は機嫌を悪くした。指揮権が移ってしまふ。だが仕方ない。

「ヘリコプターが着陸する。誘導しろ。」

テントの外では、隊員がヘリコプターを誘導していた。ヘリコプターは4台。幹部レベルの連中が乗ってるのか？時刻はもう午後6時を過ぎていた。ヘリコプター4台とも、グラウンドの真ん中に着陸した。中から、迷彩服を着用している自衛官12人と隊員12人が出てきた。その中に白衣を着けている人がいる。あいつが専門家か。・・森泉はそう思った。自衛官の1人が握手してきた。

「私は陸上自衛隊一等陸佐の前田健二だ。現場最高責任者だ。」無愛想の声だ。もう1人握手してきた。

「私は二等陸佐の坂田龍です。前田一等陸佐が万が一の事があった場合、私が最高責任者になります。」丁寧な口調と愛想のいい声だ。

「私は森泉健勝。SATの現場責任者です」一応名乗っておこう。そう思った。

「指揮権は我々に移ります。後はお任せください。SATはもう撤退・・・」

「撤退させないください。」専門家らしい人物が言ってきた。

「どういうことだ？」前田が質問した。

「隊員全員集めてください。自衛隊もSATも」

森泉は言われた通りに隊員を全員呼び出した。前田も同じく。自衛隊は全員来た。だが、SATは屋上狙撃隊員は来れなかった。

「私は野村たろう。この件の専門家として来ました。」

野村と言うのか。森泉は質問してみた。

「一体何の専門家ですか？」

「ウイルス学です。」

SATは全員驚いた。本当にウイルスの流行だったのか。  
「で、どういうウイルスで？」

野村は学校を指差した

「あの中には、ウイルスが流行しています。」

「質問に答えてないぞ。」

「そのウイルスは、今だ公表されていない、いわば新種です。」

これには、自衛隊も驚いた。

「発見したのは、今から12年前のフィリピンです。」

フィリピンか。アメリカかと・・・

「それで、症状は？」自衛隊の1人が質問した。

「狂犬病に酷似しています。ただ、感染対象は霊長類だけです。」

「よかった」。霊長類だけか「自衛隊の1人が安心した。すると他の自衛隊がいった。

「人間も霊長類だぞ」安心した自衛隊がまた不安に襲われた。

野村は説明を続けた。

「接触感染型の伝染病で、発症時間は数分から数日と個人差があります。発症した感染者は殺人衝動を引き起こし、無差別殺戮を行います。つまり狂暴化します。」

どこかのゾンビ映画を思い出す。森泉はそう思った。

「ウイルスは唾液や血液や体液などに含まれています。つまり、感染者の血液や唾液が体内に入れば、即時感染、発症します。」

即時発症か・・・

「残念な事に、今だに抗ウイルス剤が完成していません。つまり、感染者から普通の人には戻れません。」

感染すれば、一巻の終わりだな。だから、外部に感染者が漏れないように封鎖させたのか。

「だから、SAT隊員何人かに同行して、中に突入したいんです。」

「待ってくれ！なぜSATなんだ？自衛隊じゃないのか？」SATの1人が反論した。

「そうだ。野村博士。後数分すれば、第1特殊武器防護隊が来る。」

そいつらと共に突入すればいいじゃないか」前田が言った。

「この少女を見てください」と言って写真を見せた。

森泉はその写真を見た。美少女だった。

「この子フィルディナンド・アイビ。当時8歳現在20歳です。そして、このウイルスの第1感染者で世界で唯一のオリジナル型感染者。」

森泉は耳を疑った。「オリジナル型？」

「そう。学校に流行しているのは変異型です。ある科学者が、この少女をこの学校に連れてきた可能性があるんです。この学校は元々研究所として建てられる予定でした。でも依頼者が急に学校に変えさせたんです。つまり、この学校には研究室があるはずなんです。そこに彼女が居る可能性があるんです。だから、彼女を捕獲したいんです。」

前田は質問した。

「変異型じゃ駄目なのか？」

「オリジナル型は変異型よりも感染力が強く、感染者も変異型よりもずっと狂暴なんです！変異型は接触感染で、また変異する確率は低いですが、オリジナル型は突然変異する確率が高いです！オリジナル型が変異を起こし、空気感染型になりえます！」

空気感染・・・その言葉は森泉の嫌いな言葉だった。

「もし、オリジナル型が大流行したら、変異型のワクチンが効くと思いますか！？」  
沈黙が続いた。

自衛隊到着（後書き）

校内のある部屋

何かが這う音がした。

## 突入の決意

- 学校グラウンド -

「中に入りたい気持ちは、解った。だが防護隊が来る。そいつらと行けばいい。」

野村はため息をついた。まったく理解してない。

「いいですか？校内は暗いと思います。彼女を発見できても、オリジナルの感染者はウイルスの影響で身体能力が上がっています。まともに戦闘すればこっちが危ない。それに、彼女を生け捕りにしたい。生きた生態サンプルが欲しい。自衛隊の迷彩服だけは、暗闇でも目立つ。だがSATの黒服では、暗闇では目立ちづらい。彼女に気づかれないで、近づける。」

沈黙は続いた。

森泉が口を開いた。

「わかった。何人ほしい？」

野村は機嫌を良くした。やっと理解できたか・・・

「なるべく少人数がいい。4人くらいだ」

森泉はしばらく考えた。

「水谷。お前の部隊で行け」

水谷の部隊が指名された。

「了解しました。」

水谷が答えた。

「お前達。装備をまとめろ。」

水谷と部下3人が、装備を整え始めた。

「我々はどうすれば？」前田が聞いた。

「無線で、私の指示を待つてください。指示したら、武装した部隊を突入させて、感染者を全員射殺してください」

「射殺！？罪もない生徒達を射殺しろと？」

「生徒達は感染してるんです。全員、冷酷な殺人鬼となっております。」  
「だが人権が……」

「感染者はもう人間じゃないです！怪物です！」

前田はしばらく悩んだ。何悩んでんだ！早くしろ！野村はそう思った。

「わかった……」前田は渋々了解した。

水谷の部隊は準備していた。

木馬は短機関銃をしっかりと握った。手が震えていた。恐怖を感じていた。

「心配するな。俺が守ってやるよ」

火野が木馬の不安を察したか、そう言っただけで安心させようとした。

「ありがとうございます。見返りに、息子さんを一緒に探しましょう」

「ありがとう。これで貸し借りなしだな。」

火野と木馬が手を握り合った。

「お互い、感染しないように」

「撃ち合いたくありません」

石神は、不安で一杯だった。はじめから全部知っていた。封鎖の理由、伝染病。上層部の漏れた情報から知った。正気なら、今頃逃げたい。だが、SATとして逃げられない。感染したくない！校内に入りたくない！SATに入隊した後悔の念が湧いてくる。

隊長水谷は、写真を見ていた。3歳になる息子と妻の写真だ。不安や心配な時はいつもこの写真を見て、自分を勇気付けていた。不思議に、この写真は、自分の恐怖をなくしてくれる。魔法のように。

だが今回は、圧倒的な恐怖を感じていて、この魔法の写真も対して効いてない。水谷は、しっかりと銃を握った。絶対に死なない。絶対の感染しない。絶対に無事で帰ってくる。絶対に、息子にクリスマスプレゼントをあげるんだ。いつもは神や悪魔は信じない水谷だったが、今回だけ。神を信じた。

「神よお願いします。私を、私の部下をお守りください」

野村を機嫌がいい。空の注射器と、麻酔薬が入った注射器を持った。ついに長年の夢が叶う。

## 初めて知ること

北校舎は真つ暗だった。

信二達は、自分達の教室に待機していた。渡り廊下で見張りをしていた。

信二以外の生徒はほとんど、疲れたのか眠っていた。信二の友人達は眠っていた。

信二はまず、絃輝の所へ向かった。絃輝は、また祈っていた。

「絃輝、怖いか？」

絃輝は祈りをやめ、質問に答えた。

「怖いさ。」

やはりな。信二はそう思った。

「俺には将来の夢があった。」

「小説家だろ？」

「そうだ。このことを小説にして、出版してやるさ。しばらく寝ている」

絃輝はそう言つて、眠り始めた。

「ちよつといい・・・？」

信二は突然話掛けられて、一瞬驚いた。

「何だ・・・立花か・・・」

信二は立花に連れられて、女子トイレに入れられた。

「何のようだ」

「教えて欲しいの」

教えて欲しい？何を？

「一体何を話せばいい？」

「彼の事」

彼？

「彼つて誰だ？」

立花は赤面した。

「その・・・紘輝君の事」

紘輝！？あいつの何を言えばいい。

「誕生日とか、好きな食べ物とか、今欲しい物とか、好きなタイプとか・・・後・・・好きな女の子」

ははぁーん。ようは、紘輝のこと・・・

「あいつに好きな女性はいないし、彼女もいない」

その言葉に立花は安心した。

信二は真意を聞こうと、真面目に立花の顔を見た。

信二は息を飲んだ。

美少女だ。かなりの美女だ。魅力がありすぎる。信二はいままで、面と向かって話すのが面倒で、いつも他人の顔を見ていなかった。立花の顔を真面目に見るのも、初めてだ。世の中意外だな。

「そ・・・それで、なぜそんなことを聞く？」

立花は、一瞬考えた。

「昔のお礼がしたくて」

信二は瞬時に嘘だと見抜いた。

「正直に言え」

立花は、息を深く吸って、語り始めた。

「あれは、私が小学3年生の頃。当時の紘輝はかなりの問題児で、いつも悪戯されてた。彼を憎んでさえもいた。ある日、度が過ぎた悪戯を受けて、機嫌を悪くして帰ったの。その時、信号無視した車に轢かれそうになった。その時だったの。」

私は死んでアンドロイドになったとでも言うのか？

「紘輝が、私を助けてくれたの。」

ダアニイイ！

「私は軽症で済んだけど、彼は意識不明の重症だった。」

じゃあ、紘輝がアンドロイドになったのか。

「最も憎んでいた彼に助けられた。私はしばらく信じられなかった。事故から2ヶ月、彼はやっと目を覚ました。そこで、彼に質問した

の。「なぜ、あの時助けたの?」。答えは単純だった。「子猫かと思つて反射的にさ」。冗談だと解つていた。でも、あれ以上質問しなかつた。」

信二は、真面目に聞いた。

「事故に遭う前までは、彼を憎んでた。消えてしまえばと思つた。

でも、事故に遭つた後は、彼のおかげで今ここに居るんだ、生きられたんだと思つと、感謝の気持ちがいっぱいになつて・・・だんだん・・・その・・・」

「好きになつてきた。」

立花は顔を赤くした。凶星か・・・

「中学生になつてから、ずっと彼を想い続けた。生徒会長になつたのも、彼にいいところを見せたくて」

この学校じゃ、どの学年の生徒にも、生徒会長になれる権利がある。

「告白はしようとしなかつたのか?」

「恐くて、できなかつた。もしもふられたら?もしも嫌われてたら?そう思つとできなくて」

「なら、今日告白したら?」

立花は、これまでに無いほど、顔を赤くした。

「今日のこの状況だ。以外に成功する。それに、あいつ彼女欲しがつていたから」

立花は、希望溢れる顔をした。

「じゃあ、今日するね・・・」

「ああ。健闘を祈る」

「うん!ありがとう!」

立花は本当に嬉しそうにトイレから出た。

## 初めて知ること（後書き）

信二は、今日の立花の交流を通して、他人に興味を出してきた。  
友人の夢を聞こう。

まずはソフィーからだ。

## 友人達の夢

信二は、廊下を歩いてみると、竹田優に会った。

「信二！教室待機だろ！」

丁度いい。こいつと話をしよう。

「優。ちよつと話をしよう」

「え！？」

信二と優は階段に座った。

「優。お前何か夢はあるか？」

「え？何？どういうこと！？」

「だから、将来の夢はあるか？」

「何だよ。突然。気持ち悪いな。」

気持ち悪い。当然だよな。今まで他人に興味が無かったからな。

「あるよ。今までは2つだったけど、今は1つ。」

信二は黙って聞くことにした。

「1つ目の夢は、自衛隊に入りたかったんだ。でも諦めた。だって、僕心臓病になつて、体がとても弱いんだ。だから、厳しい訓練に耐えられそうにない。」

なるほど。

「2つ目は・・・」

「2つ目は？」

「親孝行することなんだ。今まで、頑張つて育ててくれた親に、とても感謝してるんだ。だから、親孝行がしたかった。」

したかった？

「母さんは、言ってくれた。「一生懸命生きて、一生懸命働いて。家族をつくつて。それが、子を持つ親の最高の親孝行だから」てね」

最高の親孝行。

「でも、僕は人の役に立ちたい。だから、今の夢は医者になること」

医者か

「でも僕馬鹿だから。」

「馬鹿でも、医者にはなれるぜ」

「えっ？」

「お前はくアドルフ。ヒトラーを知ってるか？」

「20世紀最悪の独裁者だろ？」

「確かに最悪の独裁者だ。だが、お前は彼の人生の前半部分、つまり、首相になる前の事を知ってるか？」

「知らない」

「彼は、きちんとした教育を受けたことがなかった。2、3年の実業学校では、悪い点数しかもらわなかった。そんな彼だが、なんだかんだで首相になった。だからお前だって、医者になれるはずだ。努力だよ。世の中努力だ。」

「信二……」

「勉強がでなかつたら、俺が教えてやる。だから諦めるな」

優は少し泣き目になった。

「ありがとう……」

優の事は分かった。あいつも苦労人だったな。教室に入ると山田が目に入った。

「山田、話をしよう。」

そう言つて、山田を階段に連れて行き、座った。

「山田、何か夢はないか？」

山田は即答えた

「ある！」

いつもの山田じゃない……

「それは、何だ？」

「サラリーマンになって、家族をつくりたい。4人家族がいいな。会社では進級して部長になりたい」

「普通すぎる！ー！」

「何で怒るの!？」

「普通すぎるからだ!スケール小さいんだよ!」  
沈黙が続く。

「実はもう1つ夢がある!」

「何だ?」

「個性豊かになること。僕は成績、運動神経、成績、体重、身長、座高、全て平均なんだ。顔も髪型も普通すぎる。誰も僕なんか印象に残らないよ。「オール平均君」としか覚えてくれないよ」  
さすがの同情してしまう。

「俺は友人を滅多に作らない。俺の友人でいられることを誇っていいぜ。結構気に入ってるぜ。お前の事」

「おりがとう!君の事が好きだよ!」  
大好き?

「まさか・・・お前!」

「しまった!僕が<同性愛者>だったことがばれた!」

「ホモかよ!」

さすがに引くぞ。これ。

再び沈黙が続く

「そうなんだ。僕はホモなんだ。君に初めて会った時から一目ぼれしたんだ。」

「ま・・・まあ、アレだ。お前も個性がついた。めでたいな!これからよろしく!ホモ君」

「うん。よろしく。これは秘密でね」

俺達は握手した。

「野田ああああ!男なら見張りに付け!」

野田が来た。丁度いい。話をするか。

「野田。話がある」

「信二!男なら拳で語り合うんだ!」

しょうがない。今回は野田のノリに付き合うか。

「食らえ！野田！！」そう怒鳴って、野田の顔を拳で殴った  
「いいぞ！その調子だ！だがその程度は効かん！」  
殴り返された。

「野田！お前の夢は何だ！！」そう怒鳴って、さっきより強く殴った。

「ボクシングだ！」そう怒鳴られて殴りかえされた

「熱いな！」と言って殴った。

「ロッキーのように熱くなる！」殴られた。

「何でそんなに熱いんだ！」と言って殴った。

だが、殴り返されなかった。

「そうか、お前は知らないのか。ちょっと座って話そう」

いつもの野田らしくない。俺は黙って言う事を聞いた。

「俺が熱血男になったのは、中学に入ってからだ。」

意外だな。

「小学校の頃はどちらかと言うと地味だった。熱血なんか嫌いなほうだった。」

ますます意外。

「だが、ある一言が俺の性格を変えた。当時、俺には4歳年下の妹がいた。妹は体が弱く、入院していた。いつも妹は病室のテレビで映画を見ていた。その時はまっていたのが<ロッキー>だ」

「ある日、妹は俺に言った。「兄さん性格暗くしちや駄目。ロッキーみたいに熱くなって」俺は本気にしなかった。だがある日、演習中の戦闘機が制御不能になって、妹の病室に墜落した。俺はその日以来、性格を熱くなるよう努力した。そして今の俺が生まれたんだ。」



友人達の夢2（前書き）

企業

ヴェルネ社・・・世界的に有名な医療会社。

## 友人達の夢2

野田のそんな過去があったのか・・・

「信二、少し1人してくれ・・・」

信二は立ち上がり、野田を1人にした。

教室で、鳥円がパソコンで何かしている。ブログの更新かな

「何してる？」

「ネット小説を作ってます。今回の封鎖事件を小説化してるんです。」

題名を見た。

「<大羽中学校封鎖事件>? ださい」

鳥円はむっとした。

「なら、他にいい題名がありますか？」

「感染学校」

「かつこ悪いです」

「スクール・オブ・ザ・デッド」

「きつともう誰かが作ってます」

「感染者」

「ひねりがありません」

もう、これ以上ないぞ。信二は小説を読んでみた。

「これじゃ、小説じゃなくて、新聞だぞ」

「作文は苦手です」

「俺は得意だ。一緒に作ろう」

信二と鳥円は一緒に小説を作り始めた。最初は意見に食い違いがあったが、序所にそれが無くなり、いつの間にか2人とも、楽しんでいた。

「内容は大丈夫だな」

「後は題名ですね。」

「後でじっくり考えよう。」

信二はソフィーを見つけた。ロケットペンダントで写真を見ていた。「誰が写ってるんだ？」

ソフィーは突然話しかけられて、驚いた。

「しつ信二君！驚いたよ。もう！」

「悪かった・・・で、誰が写ってる？」

ソフィーはロケットペンダントを見ていった。

「両親」

「両親のことが好きなのか？」

ソフィーは首を横に振った。

「そんなに、好きじゃない。」

「なぜ？」

「お母さんは、凄腕弁護士で、家に帰ってくる時間がいつも、遅いの。」

「父さんは？」

「お父さんは、会社の社長で、家にはほとんど帰ってこないの・・・」

「

「会社つて、まさかヴェルネ社か！？」

「そうだよ。知らなかった？」

ヴェルネ社は、今世界が注目している製薬企業で、各国の医療や薬品店にヴェルネ社製の薬品が必ず置いてあるくらいだ。

「何で日本に来たんだっけ？」

「お父さんが、日本支部の様子を見ようと来たの。私は日本に残りたいって言って残ったけど」

そつえば、俺こいつの顔をまともに見てないな。見てみよう。

ポニーテールの金色の豊かな髪が、無造作に背中に落ちていて、やさしい顔立ちだった。そこら辺の女子とは違って、気どらない美しさがあった。

思わず、心を奪われた。

「どうしたの？信二君？」

信二は顔を赤くして、「なんでもない！」と言った。

「????？」

ソフィーは首を傾げた。

くっ……思わず見とれてしまった。

「信二君？」

「そ……そういえば、お前夢とかある？」

「夢？」

「将来の夢」

「あるわよ。もちろん」

あるのか……

「好きな人と結婚すること」

結婚か……

「きつと叶うぞ。その夢」

信二は、ソフィーの好きな人物が自分だと知らずに答えた

「本当！」

「ああ」

しかし、本当に魅力的な人だ。なぜ俺を友人として受け入れたんだ？

「そういえば、なんでお前俺を友人にしたんだ？女友達は作ってないのか？」

ソフィーは顔を赤くした。

「それは、私を一番最初に話しかけてくれたから」

「どういう意味だろう？」

「当時の私は、日本語が解らなくて、フランス語しか喋れなかった。

でも信二君は、片言の無理のあるフランス語で話しかけてくれた。

正直嬉しかった。」

思い出した！こいつが学校に大事なプリントを忘れて帰ったから、届けに行っただんだ！そのとき、丁度塾でフランス語を習ってたからな。

「それに、日本語も教えてくれた。今、日本語が喋れるのは、信二

君のおかげだよ。」

て・・・照れるなー！

ん？良く見ると、もう一つロケットペンダントをつけている。家族の写真を収めているペンダントよりずっと高級っぽい。

「もう1つのペンダント誰の写真が入ってる？」

ソフィーの顔が赤くなった。

「だ・・・駄目！秘密！」

「教えてくれよ」

「駄目！」

仕方ない。諦めよう・・・

「じゃあ、見張りに行ってくる」

「うん。いつてらっしゃい」

信二は、現実離れたこの状況で初めて、他人との交流の楽しさを学んだ。

## 友人達の夢2（後書き）

「本当か？」

信一は無線で瀬木と連絡をとっていた。

『ああ！自衛隊が到着した！野村だけしって博士が、SAT隊員を4人連れて、突入するらしい』

野村と言う名前を聞いて、大輝がついにバレタと思った。

「突入の理由は？」

『アイビという女性の搜索だそうだ』

ついに、居場所が判明されたか・・・

「自衛隊の方は？」

『博士から指示が来れば、突入部隊を突入させ、全員射殺するぞうだ』

「厄介だな」

『信一！早く俺の屋上に来い。連れは無しでな』

瀬木は無線の周波数を変えた。

大輝は渋い顔をした。なんとしてでも、野村にアイビは渡さないぞ。

信二は教室の隅で、兄が感染者となって泣きじゃくる仁を慰める伊藤を見かけた。

「元気だして。男の子でしょう。ね？」

伊藤は人望のある女子だ。生徒会選挙で、立花に一票差で負けた。

「海咲、ちよつといいか？」

海咲は、信二の所へ駆け寄った。ソフィーほどではないが、美少女だ。人目を引く魅力は十分ある。

「何よ？信二君」

「慰め方つてもんがあるんだ。手本を見せよう」

信二は、仁のそばに座った。

「なあ、仁。そう悲観的になるな。確かに兄さんは感染者になった。だが、希望はある。」

仁はやっと顔を上げた。

「希望？」

「そうだ。感染者が元に戻らないって誰がいった。この先ワクチンが開発され、兄さんが元に戻るかもしれない。死んでなきゃ、どうにでもなる！」

「でも、兄さんが居なくなれば、僕の家族は父さんだけになる。」

「父さんの写真はあるか？」

仁は。首を縦に振って写真を見せた。

写真を見た瞬間、信二は言葉が出なかった。

屋上に墜落したヘリから出てきたパイロットそっくりだ！確認しておこう・・・他人の空似もある。

「お父さんの職業は？」

「ヘリコプターパイロット」

何てことだ。こいつの家族は全滅じゃないか！どういったらいいか・・・

「父さんは、まだ若いな・・・あと40年は生きられそうだ。40年は孤独にならないぞ」

父さんは死んだなんて言えない・・・

「ありがとう・・・」

信二は立ち上がり、仁から遠ざかった。海咲が後を追う。

「うまい慰め方ね。どうやって学んだの？」

答えたくない質問だ。

その時、火事の発生を知らせるベルが鳴った。

「感染者だ！感染者が来たぞ！！」誰かが叫んだ。

北校舎の暗闇から、本当に感染者がこちらに走ってきている。

2階はタイプ3、3階はタイプ2だ。

2階では信一が狙撃銃で、3階では大輝が拳銃で、射撃を始めた。

生徒達は教室に逃げ込み、ドアを閉めた。信二は、消火器を持って心の準備をした。

紘輝は再び祈りを始めた。立花は包丁を強く握った。鳥円はパソコンをリュックにしまった。

生徒全員がそれぞれの覚悟を決めた。

信一は狙撃銃で、感染者を狙撃していた。だが、どこを撃つても、感染者は怯む程度で、走り続けている。たとえ心臓を撃つたも。

感染者は、バリケードで足止めを食らった。隙間から入って、南校舎に進行しようとしたが、通り抜けると、職員達に頭を殴られ、殺される。信一は、狙撃箇所を胸から頭に変えた。頭を撃たれた感染者は、即活動停止した。つまり、頭が弱点だな。信一はそう確信した。

3階では、大輝が拳銃で撃っていた。大輝は初めから、頭を撃っていた。

感染者は撤退を始めた。味方の死体を引きずって、北校舎の暗闇に戻って行った。

「感染者は逃げていった。もう安心だ」

信一は大声で言った。

その言葉に全員安心した。

信一は、大輝の所へ駆け寄った。

「なぜ、撤退したんだ？」

大輝は拳銃を装填した。

「知らん。嵐の前の静けさかも」

## 襲撃（後書き）

感染者達は自分達の領土に戻って、仲間の死体を職員室に溜め込んだ。

すると、職員室の隅で怯える1年生を発見した。  
感染者達は、1年生に牙を向けた。

来訪者（前書き）

是<sup>ぜ</sup>田<sup>た</sup>・・・北校舎から来た。

## 来訪者

立花は、迷っていた。

絃輝に今すぐ告白するべきか？あるいは、もうちょっと後でしようか？

偶然コインを見つけた。

そうだ！コインストをしよう！表なら告白。裏なら後で。立花コインストをした。  
結果は裏だった。

信一は、北校舎から、誰かが歩いてくるのを確認した。感染者か！だが、狙撃銃のスコープで見たときは驚愕した。

感染者じゃない！普通の生徒だ！

「皆来てくれ！」

生徒、職員、全員来た。

「あれをどう思う？」

全員、北校舎から感染してない生徒を見て、戸惑いを隠せない。

「そこでとまれ！」

来訪者は止まった。

「信二、確認してくれ」

信一は、自分の拳銃コルト・ガバメントを信二に渡した。

信二は、バリケードの隙間を匍匐全進で通り過ぎて、来訪者の所へ向かった。

体のあらゆる箇所を徹底的に調べた。

だが、傷ひとつない。

「誰かに、血やつばをかけられた？」

来訪者は首を横に振った。

「傷はないし、唾液や血液はかけられてないそうです！」  
信二はそう怒鳴った。

「よし、感染してない！連れて来い！」信一はそう言った。  
信二は来訪者を2年2組に連れて行った。  
生徒達は来訪者を囲んだ。

「どいて、どいて」

百合がコップを持って、来訪者に駆け寄った。

「ココアよ。飲む？」

来訪者は、うなずきもせず、黙ってコップを受け取って、ゆっくり  
飲み始めた。

「名前は？」

百合は、優しい声で尋ねた。

「ぜ・・・是田」

是田と言う名前だった。

「是田君。どこに隠れてたの？」

是田は震えた声で言った。

「しよ・・・職員室」

全員驚いた。

「ここに来るまで、誰にも会わなかった？」

「うん・・・誰も居なかった。」

信じられない・・・信二はそう思った。

「とにかく、今は休んでね」

是田はココアを飲みほした。

来訪者（後書き）

是田は頭痛に襲われていた。

皆には、誰にも会ってないと言っただけど、本当は、大勢の人に会った。

誰かが僕にキスをしたんだ。

## 罾と襲撃

信一は考えてた。あの少年（是田）が感染者と一度も接触せず、ここまで来るのは可能なのか？  
もしかして、感染者は1箇所が集まっているのか？  
とにかく、油断は禁物だ。

信一がそう考えていると、また北校舎から、誰かが来た。狙撃銃のスコープで、顔を確認した。

何てことだ・・・感染していない人だ・・・

「助けて！お願い撃たないで！」  
女子だ。

また生徒達が、集まった。

「まじかよ・・・」

「連続で2人も、ありえねー」

「嘘でしょ！」

動揺している。

ソフィーは信二に話しかけた。

「どう思う？」

「・・・おかしい。」

立花は、紘輝に話しかけた

「これはもしかして罾かも」

紘輝は理解に苦しんだ。

「罾？」

「そうよ・・・罾」

「連中は狂暴な怪物だ。そこまで、知恵はないよ。」

「でも、動物的本能はあるんじゃない？動物も罾はしかけるし・・・」

「

「でも、罨だとして、感染してない生徒をこっちに送って向こうに何の得がある？」

確かにそうだった。立花は考えすぎかと思った。

「お願い！助けて！」

「信二。行けるか？」

信二は、バリケードを越え、女子生徒に近づいた。そして、傷を探したが、無かった。

「誰かに、血か何かをかけられた？」

「かけられないわよ……」

「誰かに会った？」

「会ったわ……」

信一、信二、大輝は銃を構えた。

「誰に会った？」

「分からない。分からないのよ……暗くて見えなかった」

「誰かに触られた？」

是田の頭痛は激しくなった。誰かに、キスされたって言えば、殺されるに違いない。そう直感した是田は、嘘をついた。本当は、誰かに自分の口にキスをされた。そして、誰かに渡り廊下に連れて行かれた。だが、殺されると思って、嘘をついた。

頭痛が酷くなっていく一方だ。誰かに話かけられた。

その時の彼の目は殺意に満ちていた。

### 3階渡り廊下

誰も、見張りに居なかった。全員2階の渡り廊下に行ってしまった。そんな、渡り廊下のバリケードに近づく集団がいた。

### 2階渡り廊下

誰かが走っていく音がした。



「拳銃の弾が切れた！」

「くそ」

信一が狙撃銃で、教室に向かった。

教室では、すでに6人が感染していた。

信一は撃とうとしたが、弾切れの音がした。

「くそ！！」

感染者が1人襲ってきた。信一が反射的に銃で殴った。短機関銃に切り替えて、乱射した。弾丸は感染者達の体を貫いた。5人殺したが、乱射した短機関銃の弾が切れた。さっき殴りつけた感染者が襲ってきた。

生徒達は、階段を上がって、3階と4階に逃げようとした。だが、何かの集団が、上から下がってきた。

感染者の集団だった。眼が真っ黒。タイプ2だ。

タイプ2の感染者が生徒の集団を襲い始めた。生徒達は、1階に逃げようと階段を下がった。

信一が襲ってきた感染者の頭をつかんで、一回転した。感染者の首から、骨が飛び出し、首の皮と肉が引き裂かれ、血が噴出した。

だが、信一の背後から感染者が襲ってきた。信一が反応し切れなかった。

1発の銃声があった。

感染者の頭部から血が噴出した。

信二が慣れない銃で、見事に感染者の頭を撃ちぬいた。

「助かった。信二」

信一は狙撃銃と短機関銃を装填した。

「その銃を大輝先生に渡そう」

大輝はバリケードの前で、潜り抜ける感染者の頭をバールで殴っていた。ソフィー、野田、鳥田がやってきた。

「先生！感染者が3階のバリケードを突破してきました！」  
大輝は、舌打ちをした。

立花と紘輝は、階段で感染者の集団と戦っていた。

「立花！逃げろ！」

だが、感染者の1人が紘輝を羽交い締めをした。その感染者を立花が包丁で刺した。

「助かった」

「紘輝君！立花さん！逃げましょう！」

海咲と栗山と優が来てそう言った。

信一と信二が教室を出た。立花と紘輝と海咲と優が階段からやって来た。

「3階はもう駄目！」

信一が、自分の不注意さを呪った。階段から大勢の感染者が来た。だが、山田が消火器を撒き散らし、感染者を遠ざけた。

信二達はバリケードに向かった。

「先生！もう駄目だ！」

山田が走ってきた。後ろには大勢の感染者が追っていた。

武器を持った職員達が突撃した。

「俺について来い！」

大輝が叫んで、走り始めた。後ろでは、職員、生徒、感染者の乱闘が起きていた。

「皆、大輝先生について行け！！」

紘輝は後ろの人たちに叫んだ。後は彼ら次第だ。信二達は走った。走り続けた。

もう、大輝について行くのに夢中だった。大勢の悲鳴が聞こえる。

信二は、この時だけは真の恐怖を感じた。

**罾と襲撃（後書き）**

グランド

「博士、突入の準備は？」

水谷は野村に聞いた。

野村はまだ興奮していた。

「博士？」

「突入しよう」

## 突入

水谷部隊が北校舎の玄関前に立っていた。他の隊員2名が職員玄関を開けた。水谷部隊と野村が中に入ると同時に、扉が閉まった。

中は完全に真っ暗だ。

水谷部隊は、胸に装着しているフラッシュライトを点けた。野村は持参の懐中電灯を点けた。

「いいですか？感染者との接触は極力避けてください。」

野村は注意した。

「よし！俺と石神は、先頭に立って前方を警戒する。火野と木馬は後尾に立って後方を警戒しろ。野村博士は真ん中に居てください。」  
水谷の部隊は階段をゆっくりと上がった。

2階に着いた。

「職員室です。隊長」

石神が小声で囁いた。

「俺が職員室の中を見てくる。お前達は、ここで待機しろ」

水谷は、職員室に入っていた。何かにつまずいた。

死体だった。大勢の死体が職員室にたまっていた。

「吐き気がしそうだ・・・」

職員室を見渡したが、死体以外何も無い。

すると、廊下の奥から叫び声がした。

水谷が、すぐに職員室を出た。

「どこからだ！」

「廊下の奥の図書室です。」

「火野！お前が行け！無線はオンにしておけ！」

火野が、図書室まで慎重に歩いていった。

火野の声が、無線から聞こえる。

『隊長！今図書室の扉の前に居ます』

「入れ」

『見渡しても、誰も居ません』

「よく調べる。叫び声は図書室から聞こえたんだ。油断するな！」

『少年だ！少年が少女を食っている！』

野村は水谷の無線を奪った。

「感染者だ！射殺しろ！」

『自分には無理です！撃てません！わあ！こっちに来るな！わあああああああああ』

水谷達は全力で図書室に向かって走った。

「火野！今行くからな！」

図書室に入ると、少女が火野に掴み掛かり、火野が必死で抵抗していた。

「隊長！こいつをどうにかしてください！」

水谷は少女を後ろから抱きつく要素で拘束した。そして少女を床に叩きつけて、足で少女を押さえつけた。

「何してる！？撃つんだ！早く！」

全員、銃こそ向けているが、引き金を引けなかった。

「撃つ必要ないでしょ！まだ少女だ！生徒なんだぞ！」木馬が反論した。

「違う！怪物だ！」

野村は、水谷のホルスターから自動拳銃を奪った。それで、少女の頭を撃ちぬいた。

全員、言葉が出なかった。野村は拳銃を黙って水谷に返した。

だが、廊下から恐ろしい奇声が聞こえた。

木馬が廊下を見てみると、大勢の生徒が奇声を上げながら、図書室に走ってきた。

木馬は反射的に扉を閉め、鍵を掛けた。

扉の叩く音が、聞こえたがいつの間にか止んだ。

「博士！これは一体何なんです！？」

水谷が怒鳴って質問した。

「外で説明した通りだ。」

「確かに狂犬病みたいだとは聞いた。だが、あそこまで狂暴だなんて！人を食ってたぞ！」

「君らは、与えられた任務は遂行すればいい」

「あんなのが相手だとあんたの身は守れない！俺達の身も！」

「銃で撃ち殺せばいい」

水谷は、冷静を取り戻した。

「いいか？博士。俺達SATが、学校を封鎖するなんて普通はありえない。さらに、テログループでもない生徒、職員に対する射殺許可なんて、前例にない。リアリティーが無さ過ぎる出来事が起きている。」

任務は遂行していい。だが、知っている事を全部話せ。全部な！」

野村は、しばらく考え込んだ。

「アイビの事は話したな？」

「オリジナル型の感染者だろ」

「実は、彼女には、免疫がある。変異型も含めて」

「だから、彼女が欲しいだろ」

「ある科学者が、彼女を独占し、ここに連れてきた。」

「少女の事は探す。だが、感染者について教えてくれ」

「感染者は、体の全箇所が活発化している。心臓を撃つても、約5分間は活動する。一発で沈めたいなら、頭を撃て」

「少女の居場所は？」

「それを探す」

水谷は舌打ちした。

「隊長、感染者がいなくなりました」

木馬が報告する。

「彼女を見つけたら、ここから出れるんだな？」

「私が任務終了を外に伝えない限り、誰も出られない」

水谷部隊は体制を立て直した。

「教室1つ1つ確認しよう。」

図書室の扉を開けた。

その時、職員と思われしき感染者が立っていた。

水谷達は銃を反射的に撃った。

5発の弾丸が、感染者の腹部と頭部を貫いた。

「今の銃声でやって来るかも。早く移動しよう」

水谷達は走り出した。

## 生存者

信二は、気づいたら美術室にいた。

無我夢中で走っていた信二は、他の人を確認していなかった。

美術室に居たのは、信二、信一、大輝、紘輝、立花、海咲、ソフィ  
ー、山田、野田、優、栗山だけだった。

「鳥円は？鳥円は知らないか？」

信二は全員に訊ねた。だが、全員首を横に振った。

信二は、鳥円を探そうと、扉を開こうとした。

「行っても無駄よ。無事なはずないわ。感染者にやられたのが、オ  
チよ」

海咲はそう言った。

「だが、まだやられたとは、限らない。」

信二は出て行こうとした。

「まで。お前が行く必要ない。」

止めたのは、大輝だった。

「俺が探しに行く。」

大輝がそう言った。

「なら、俺も」と信一。

「あなたは、ここに残ってください。感染者が襲撃したら、1番戦  
力になるのはあなたです。」

大輝はそう言って、バールを持って美術室から出た。

信二の手が震えていた。初めて銃を使い、初めて殺人を犯した。常  
人だったらとつくに精神に異常があるだろう。

立花は、罪悪感を感じていた。あの時は、無我夢中で戦っていた  
けど、2、3人の生徒を殺してしまった。それ以上かも。

もう立花に、包丁を握る覚悟が出なかった。

大輝は、釘バットを見つめていた。

「向こうが襲ってきたんだ。正当防衛だ」

だが、感染者達のわめき声と殺す瞬間の記憶が、頭から離れなかった。

「神よ。私の罪をお許してください」

十字架を握って、そう言った。だが、祈りの言葉はもう意味はない。はつきりそう悟った。

死後の世界に行くとしたら、間違いなく自分は地獄行きだ。もっとも、この惨状も地獄と言えるがな。

水谷達は、家庭科準備室の前に立っていた。

「開けるぞ。準備しろ」

木馬が、ドアの横からドアノブを握った。水谷、石神、火野がドアの前に立って銃をしっかりと構えた。

水谷が、首で合図したと同時にドアが開く。

中には、調理器具以外何もなかった。

「隠れて」

木馬が小声で囁くと同時に全員、準備室に入った。

「どうした？」

「12時の方向に感染者」

「数は？」

「1人」

水谷は、顔を出して、言われた方向を見た。

確かに、成人感染者が立っていた。だが、こちらを向いてない。好都合だ。距離はざっと3メートルほどだな

「俺が始末しに行く。援護してくれ」

水谷は、コンバットナイフを取り出して、右手で握ってしのび足で、感染者に接近した。

その後ろを、残りの3人で感染者に銃口を向けた。

水谷は、感染者の真後ろに居た。狙うべき場所は最重要ポイント・つまり首だ。

水谷は、左手で感染者の口を封じると同時に、右手のナイフを首に突き刺した。

「許してくれ……」

感染者は叫ぶこともできず、ただ死を待つだけだ。

数十秒が経った。

感染者は、びくりとも動かなかった。

ナイフを抜くと同時に、首から鯨の潮吹きのように大量の血が出た。

感染者は床に倒れた。脈を量った。

「始末した」

4人が、水谷に駆け寄った。

「見事だったです」野村が言った。

「殺人行為を褒めないでくれ」

水谷は、ナイフをしまった。

「理科室へ行って見ましょう」

だが準備室の死角から、感染者が飛び出してきた。火野は、反射的に感染者の鼻を右拳で殴った。

鼻の折れる音がした。

感染者は怯んだ。この隙を見逃さず火野が感染者の首をへし折った。

「君達の神経は驚かされる。」

火野はなにか呟いた。

「理科室へ行きましょう」

水谷達は、階段を駆け上がった。最上階に着いた。階段の手前に理

科室があった。

「ビンゴ」

木馬が、ドアの横に立ち、残りの3人がドアの前で銃を構えた。水

谷が合図を送った。

だが、ドアが開かなかった。

「鍵が掛かっています。」

「

「石神、やれ」

石神は、ポケットからキーピックを取り出し鍵を開ける作業を開始した。

「警戒しろ」

数十秒経った。

カチッ

鍵が開いた。

再び、さっきの態勢に並び変えた。木馬が鍵を開ける。

何も飛び出して来なかった。ほっとしたもつかの間

「隊長！後ろ！」と木馬が言った。

後ろから、職員感染者が全力で走ってきた。

石神が、即座に頭を狙って撃った。

弾丸は、感染者の頭を正確に貫いた。

「早く中へ！」

野村の掛け声と同時に全員理科室に入り、ドアを閉め鍵を掛けた。

理科室を見渡しても感染者は居なかった。それどころか、怪しい物一つさえ無かった。

「理科室には無かったな。」

水谷が、言った。

「いえ、何かあるはずですよ」

野村が言った。そのうち2人の口論が始まった。

「隊長！奥に扉があります！」

木馬の言う通り、理科室の奥に扉があった。

全員、扉の前に立った。

「駄目です。鍵が掛かっています。」

「石神。できるか？」

「鍵が複雑です。単純なものではないとできません」

水谷はため息をついた。

「火野」

「了解」

火野は深く息を吸いこんだ。

「ん!!」

右足で扉を蹴りこんだ。

扉は外れた。

中は煙つぽかった。全員咳き込んだ。中は広々としていた。

だが、怪しい実験家具がたくさん置いてあった。注射器、メス、拘束具など。まるで、マッドサイエンティストの部屋だ。

「ビンゴ！」野村は喜んだ。

木馬が興味本位で注射器を取ろうとした。

「触るな!!」

野村の怒鳴り声が部屋中に響いた。

「この中にある物は絶対触るな」

水谷は、木馬に目で注意した。

それにしても、本当にマッドサイエンティストの部屋だな。木馬は

そう思った。

「そんな馬鹿な・・・彼女が居ない」

そうだった。今回の任務は、アイビの捕獲だった。

全員がそう思った。

「拘束具があるのに、なぜ彼女が居ないんだ！」

「見渡す限り、もう扉はありません」

木馬は1つの録音機を見つけた。再生ボタンを押した。

『5月26日。今日は晴れ』

全員、この声に釘付けになった。

『アイビの体液にもウイルスは存在した。今日の彼女は比較的に大人しい。妙だな。』

今日も、試作段階のワクチンの実験を行った。ワクチンはウイルスには効かなかった。3年間も研究したが、何の収穫もない。そうい

えば、明日は彼女の誕生日だ。何かプレゼントを買わなくては  
プレゼント。その言葉が水谷に深く沁みこんだ。

『5月27日晴れ。今日は彼女の誕生日。ぬいぐるみとCDをあげ  
た。

彼女は興味しんしんでぬいぐるみを見つめた。CDを聞かせた。え  
らく気に入ったそうだ。

これまでの研究で分かった事は、ウイルスは接触感染すること。霊  
長類のみの感染。ウイルスに感染した者は狂暴化すること。本当に  
ワクチンは開発できるのか？』

『6月1日くもり。職員の1人が彼女を見つけてしまった。俺はそ  
いつを捕まえて、薬物で精神をおかしくしてやった。理由もなしに  
職員が精神病院に行ったから、生徒が不振がつてる。そこで俺は7  
不思議の8番目をでっち上げて生徒に吹き込んだ。生徒は信じてし  
まった。この年頃の・・・』  
途中で乱れてしまった。

『6月6日。実験用のニホンザルから新しい変異型が見つかった。  
空気感染可能の変異型だ。俺はすぐに、感染していたニホンザルを  
焼却処分した。万が一の事を考えて他の猿も処分し、俺の血液検査  
をするつもりだ。』

空気感染型がすでに生まれていたのか。

『7月1日。新たな変異型が生まれた。感染者をより狂暴にさせる  
ものだ。』

『7月2日。今のところ、変異型は2つ。1つ目は、感染者の身体  
能力をあげるものだ。2つ目は感染者を狂暴化させる。この2つを  
タイプ2とタイプ3と呼ぶことにした。タイプ2は宿主を必要とす  
る。

つまり、感染者が死ねば、ウイルスも死滅する。タイプ3の感染者  
の思考は攻撃性だが、タイプ2の感染者の思考は今だ不明だ。』  
これ以降、雑音しか聞こえない。

## 親子の再会

「隊長！エアダクトです！」  
全員、ダクトを見た。

「こんな所にダクトなんて不自然だ。」

水谷は、確かにダクトの位置に不自然を感じた。

「石神、調査しろ」

石神は、椅子でダクトをあがろうとした。

「待て。短機関銃は邪魔になる。拳銃に変える」

石神は、短機関銃を水谷に渡して、拳銃を装備し、胸のフラッシュライトを手持ちに変えた。

「無線を開け」

ダクトは、狭い空間で人1人が匍匐前進でやっと行けるくらいだ。

「石神、どうだ？」

『奥に、冷蔵庫らしい物があります』

「それを確認しろ」

しばらく沈黙が続く。

『試験管が入ってます。3本』

「ラベルは貼ってあるか？」

『はい』

「読め」

『え〜と・・・DVO / DVT2 / DVT3』  
デモ-ニヨウイルスオリジナル  
「DVO」

野村が呟いた。

「デモ-ニヨウイルス？」

「今回の事件の原因のウイルスのオリジナルだ」

「つまり？」

「彼女の捕獲ができなくても、血液採取さえできれば任務は達成で

きる」

『すぐにもど……』

「どうした？」

『音が近づいています』

「音？」

『化け物だ！化け物が近づいてくる！』

「逃げろ！早く戻れ！」

『駄目だ！向こうが早すぎる！』

「諦めるな！」

『来るな！化け物！』

銃声が3発鳴った。拳銃で抵抗したのだろう。

「石神？」

『化け物を撃退しました』

石神が、ダクトから出てきた。

「一体何を見た？」

「化け物です……そうとしか表現できない」

化け物？別の怪物がこの学校内に居るのか？

「試験管です。」

野村は震えた手で受け取った。恐怖だ震えてなかった。興奮だった。まるで、長い間欲しがっていた物を手に入れた子供のように興奮していた。

「任務を達成」

全員、理科室の出口へ向かった。

「これで、出れる」

だが、ドアを開けた瞬間に、女子生徒の感染者が、野村に飛び掛った。その際、野村は試験管を落とし、どこかに転がっていった。

「こいつを殺せ！」

野村は、感染者の胴体を押さえながら叫んだ。だが、水谷達は躊躇った。

「何してる！早く撃つてくれ！」

「隊長！俺には撃てません！」

木馬は叫んだ。

「お・・・俺にも無理だ」

「何を言ってる！？こいつは感染者だ」

石神は、標準を感染者の頭に向けたが、相手は大人ではなく、子供だ。戸惑いを感じた。

「くそ！」

水谷は、感染者を後ろから首を絞めた。

「すまない・・・許してくれ・・・」

そのまま首をへし折った。

「ありがとう」

「お礼は言わないでくれ・・・」

今度は子供を殺してしまった・・・

「試験管は？」

全員、しまつととばかりに探した。

「奥に転がっていったはずだ」

全員、奥にライトを当てた。

1人の少年が試験管を持っていた。

「坊や。それを渡してくれ」

火野は、できるだけ優しく言った。

だが、少年は、銃を恐れて逃げた。

「くそ！追え！」

水谷達は、少年を追った。だが、追った先は階段だった。

「俺と博士は2階。石神は3階。火野は4階、木馬は5階を調べる！」

「いえ。拳銃をください。私は1階を調べる」

野村が言った。

「博士、でも・・・」

「早く！」

仕方ない。銃を渡した。

「合流地点は職員室前だ！行け！」  
全員、それぞれの場所へ行った。

水谷は、2階の隅々を搜索した。

「こちら水谷。2階に居ない。」

「こちら石神！3階は居ません」

「こちら木馬！居ません」

「火野！火野はどうした」

火野は4階の教室の1つ1つを確認した。くそ！少年が居ない！  
教室を出た。だが、廊下の真ん中に男子生徒が立っていた。血まみ  
れだ。感染者だな。

「俺は負けないぞ！死んでたまるか！」

感染者が火野に向いた。

だが、その顔を見たとき驚いた。

火野と同姓同名の息子だ！

「くそ！嘘だろ！」

息子はわめき声を上げながら、走ってきた。

## 死の直前の思考

火野は、襲い掛かってきた感染者・・・ではなく、感染者となった息子>を取り押さえた。

「落ち着け！俺だ！父さんだぞ！！」

火野は息子に呼びかけた。感染者とは言え、自分の愛する息子を殺害できるわけがない。

だが、狂暴化した息子に言葉は通じなかった。

「お前の父親だ！！お前を殺したくない！正気に戻れ！」

火野は必死に訴えかけた。

一瞬、息子が暴れなくなった。そして火野を見つめていた。

「そうだ・・・お前の父親だ。父さんだ。お前を殺したりなんかしない」

息子は大人しくなった。

「勇也」

だが、息子が噛み付こうとした。

火野は息子の顎と後頭部をつかんだ。

「落ち着け！俺だ！」

だが、落ち着く気配がない。

「勇也・・・」

火野は、息子に目から本気の殺意を感じた。

「勇也・・・」

火野は、覚悟を決めた。他の連中に殺されるくらいなら、俺がこの手で・・・

「許せ・・・勇也！」

息子の首を、一回転させた。

映画なら、きれいに回転するだろうが、実際は肉が引き裂かれ骨が飛び出した。

火野をこの殺し方に後悔した。



「隊長！弾が一発も無い！弾が切れた！」

『落ち着け！救助に行く！感染者の数は！？』

「軍団だ！」

言い終わる瞬間、感染者が女子トイレの扉を開け、火野の個室のドアを叩き始めた。

「駄目だ！連中が来た！」

『落ち着け！拳銃があるだろ？そいつで倒すんだ！』

火野はホルスターから自動拳銃を抜いた。

弾丸は7発。予備の弾倉は必要ないと思って持ってきていない。

火野は、拳銃でドアを6発撃った。弾丸は木造のドアを貫通し、感染者に当たった。

だが、撃たれた感染者は1人だけ。

ドアの鍵が壊れ始めた。

残り1発。使い道は1つ。

火野はヘルメットを脱ぎ深呼吸した。

『火野！現在位置は！？』

「もうすぐあの世に行きます」

「落ち着け！すぐに行く！現在位置は？」

隊長が俺を助けようとしている。だが、俺は助からない。

火野はポケットから写真を取り出した。

息子が写っている。自分の手で殺した息子が……

妻とは離婚し、俺の唯一の家族だった。

「勇也。もうすぐ行く」

火野は拳銃を自分の頭に向けた。未練はない。覚悟だけが必要だ。

不思議だ。死ぬって言うのに冷静でいられる。

『火野！現在位置は！？』

鍵が壊れかかっている。皮肉だな。人生最後の場所が女子トイレだなんて。

職員室前の水谷が必死に連絡している。

「火野！早まるな！位置を教えろ！！」  
石神と木馬が焦りの顔を隠せない。

「火野！いまだこだ！？」

『隊長。今までありがとうございます』

「早まるな！！助かる！」

『息子だ・・・息子の声が聞こえる・・・』

「息子をどうする！？1人この世に残していく気か！」

『息子は殺しました』

全員ぎよつとした。

「早まるな！」

『息子がそばに居る・・・』

無線から銃声が出た。何か撃たれる音も同時に鳴った。

「火野！応答しろ！火野！！」

沈黙が続く・・・

階段から降りてくる集団の足音がした。

「職員室に入れ！」

全員職員室に入り、鍵を閉めた。

足音が通り過ぎる音が続く。

「隊長・・・火野先輩は？」

「恐らく・・・自殺した・・・」

「野村は？野村博士は？」

水谷は、しまったという顔をした。

「感染者達が完全に通り過ぎてから搜索する」

「無線は持ってないのか？」

「ない」

全員悪態ついた。1人で行動させなければよかった。

全員2つの感情に支配されていた。

火野の死の悲しみ。

野村への怒り。

死の直前の思考（後書き）

美術室

「大輝先生と鳥円は大丈夫かな？」

信二は心配していた。

信一は答えた。

「美術室に入るまえに拳銃を渡したろ？」

信二はうなずいた。

「なら平気だろ。ボールと拳銃を持っているなら……」

## 感染者の牙

鳥円は、2階校長室で隠れていた。

さつき6階で試験管を拾った。SAT達が持っていたものだ。銃が恐くて逃げ出してしまった。

隣から話し声が聞こえる。

校長室と職員室は直結しているから、職員室に入るドアがあった。

一応鍵は閉めた。

「隊長。隣は校長室です。」

「入ってみよう」

やばい！鳥円は校長室の机に隠れた。校長は椅子に座ったまま死んでいる。

「駄目です。鍵が掛かっています」

「石神。できるか？」

「鍵が複雑です」

「仕方ない」

諦めてくれ。鳥円はそう願った。

ドアノブが壊れる音がした。

「隊長。男性が座ってます。」

「確認してこい」

誰かが机にやって来た。お願い。ばれないで！

「死んでます。机の上に睡眠薬があります。たぶん、睡眠薬の過剰摂取で自殺したと思います」

「よし。ここには何もありません」

「隊長。博士を捜索しましょう」

隊員達が、廊下へのドアの鍵を開け、出て行くのを聞いた。

良かった。気づかれずに済んだ。

だが突然校長が立ち上がった。

いや、持ち上がったのだった。

鳥田は顔を出して確認しようかと考えた。  
だが、何かが校長を食べる音がした。  
血が天井から垂れてくる。天井に何か居るのか？  
鳥田は天井を見てみた。

#### 美術室

信二と信一以外全員睡眠を取っていた。

「信二。お前も寝ろ」

「いいの？」

「今のうちに寝ておけ」

「やめとく」

信二は、はっと目を覚ました。美術室には信二以外誰も居なかった。  
俺を置いて皆どこかへ行ったのか？

信二は美術室を出た。

生徒玄関に行ってみると、扉が開いていた。

外へ出た。

綺麗な青空が広がっていて、太陽が堂々と輝いていた。

だが、誰も居ない。

校門を出てどの家を訪ねても誰も居ない。

皆どこへ行った？

だが、気づいた時には大勢の感染者が自分を囲んでいた。

「誰か助けて！」

信二は、はっと目を覚ました。

辺りを見渡した。ちゃんと全員居る。いつの間にか夢を見たんだ。

「大丈夫か？」

信一がいた。

「うなされていたぞ。悪夢を見たな？」

信二は、冬なのに汗をべったり掻いている自分に気づいた。

皆の顔を見た。

ソフィーは、無邪気な子供のような寝顔をしていた。

野田は、熱い寝顔をしていた。

山田は普通だ。

竹田は、ゲームをしているような寝顔をしていた。

海咲は難しい顔をしながら寝ていた。

紘輝は、十字架を握りながら寝ていた。

立花は、紘輝の肩に寄せて寝ていた。幸せそうな寝顔だ。

栗山は不安そうな寝顔だ。

皆それぞれだな。

鳥円は無我夢中で走っていた。

何だよ！あのく化け物>は!？

鳥円は天井を見た。

もう追ってない。大丈夫だ。

鳥円は試験管のラベルを見た。

「DVO?」

鳥円はノートパソコンを取ってインターネットで調べようとした。

「それを渡せ」

前方に拳銃を持った男が立っていた。顔全体を隠しているマスクを被っていた。声がおかしい。ボイスチェンジをしているな。

持っている拳銃はコルト・ガバメントだ。

「渡したら?」

「お前を助けてやる。」

鳥円は信じなかった。なら、わざわざ正体を隠す必要ないのに・・・それに、引き金を引こうとしている。

助けてもらえない。そう思った。

逃げようと思った。

だが銃声がとどろき、腹に銃弾が突き刺さった瞬間、焼け付く熱さを感じた。

鳥円は床に倒れた。胃を撃たれた。腹腔へ漏れ出した胃酸によって、中から徐々に体が侵されていく。

鳥円の命も残り十数分だ。

鳥円は力を振り絞って試験管を割った。

「なんて事を！」

男が駆け寄っていく。

「苦しみながら死ね」

男が鳥円を蹴り飛ばし、去っていった。

鳥円は人生最後の十数分を無駄にしなくなかった。

パソコンで、ネット小説編集ページを開いた。

苦痛と闘いながら、タイピングした。

<あらすじ：この物語は真実です。大羽中学校封鎖の真実を書きま  
す。>

<作者：和真鳥円>

鳥円は、題名を消し、新たな題名をつつた。

<感染者の牙>

鳥円は咳き込んだ。投稿をクリックした。

<この小説は投稿されました。反映まで時間がかかります>

鳥円は安心した。これで真実は、ネットワークを通じて世に配信さ  
れる。

意識が薄れてきた。死が迫っている。

「死にたくないよ・・・ママ・・・ママ・・・ママ・・・ママ・・・

だが、瀕死の鳥円の横に、感染者が立っていた。

感染者は、牙を鳥円に向けた。

そして・・・

## 全てが変わる瞬間

### 美術室

大輝が戻ってきた。

「先生、鳥円は？」

「見つからなかった」

「北校舎へ行ったのですか？」

「行かなかった。南校舎から感染者が姿を消した。恐らく全員北へ行ったのだろう」

信二は悪態ついた。つまり、鳥円は北校舎へ逃げたのか？

信二は、鳥円が心配だった。

「今、向こうへ行くのは得策ではない。わかるな？」

大輝は、信二に質問した。

信二はうなずいて、答えた。

「とにかく、いざと言うときのため、今は休んでいろ」

「トイレに行きたい」

信二は言った。

「ついて行こうか？」

「いえ、ボールだけください。自分の身は自分で守ります」

信二は、ボールを受け取って美術室を出た。

廊下は、暗い。

信二は、感覚を頼りにトイレに入った。

トイレで小便をしていると、ドアが開く音がした。

ボールを構えた。

だが、懐中電灯に照らされた。

「何だ、ソフィーか。ここは男子便だぞ」

「ごめんなさい」

信二とソフィーはトイレを出た。

信二が手を洗った。

「何でここに来た。」

「行っておきたいことがあって」

「何で？」

「今がいい・・・ううん、今じゃなきや駄目だと思ったの。この先、もう言えるチャンスや機会が無いと思うから」

この状況だからな。

「実は、好きな人がいるの」

こいつに好かれる男子は幸運だな。で、俺は相談役か・・・

「相手は誰だ？」

「とても身近な人。すごく優しく、頼りになるの・・・」

「誰だ？」

「それは、この人」

そう言つて、ロケットペンダントを渡してきた。信二は開けて見た。写っていたのは信二だった。つまり・・・

「俺が好きなのか？」

ソフィーは、うなずいた。

信じられない。こんな魅力的な人に好かれるなんて・・・緊張してきた。

「な・・・なぜ今言う・・・？」

「もう、この先告白できないと予感したから・・・」

信二は、しばらく黙り込んだ。

「お前は美術室に戻れ。俺は鳥円を探しに行く」

「なら、私も」

「駄目だ！危険すぎる」

「危険なら承知よ。それに、彼は私の友人。友人を見捨てられない」  
信二は考え込んだ。

「分かった。だが、何かあったら、俺にかまわず逃げるか隠れる」  
ソフィーはうなずいた。

信二はソフィーの手を引いて、渡り廊下に向かった。

机と椅子でできたバリケードは半壊していた。かえって好都合だが。

信二とソフィーは北校舎に行き、階段の前に立った。

「上と下とどっちがいい？」

「何で聞くの？」

「女の勘は鋭いからだ」

「じゃあ、下」

信二は、ゆっくり階段を降りた。下に気配はない。

「鳥円のオタクぶりには感服する。」

「中学生とは思えないよね」

「しかしこんななによりゆっくり歩いてると、お化け屋敷でデートしてるカップルみたいだ」

「あなたにユーモアのセンスはないと思ってた」

「ないさ」

「いいえ、あるわ」

「いや、絶対ない」

「じゃあ、そうしておきましょう」

「料理は？」

「？」

「料理はできるか？」

「どうしてそんなこと聞くの？」

「いつも、弁当はカロリーメイトかパンじゃないか」

「できるよ」

「本当に？」

「私のフランス料理は絶品よ」

「そいつは楽しみだ。別のときに別の場所で……」

信二は、言葉が出なかった。

「どうしたの？あつ」

ソフィーも言葉が出なかった。

1階の廊下の真ん中に、鳥円の死体があった。

「引きずられた後がある」

信二は、死体を調べた。

「首を噛まれている……」

信二の声に、悲しみが混じっていた。

「直接の死因ではないは……」

ソフィーの声が今にも泣きそうだった。

「どういう意味だ？」

「おなか……」

鳥円の腹に、ドングリほどの穴が開いていた。

「撃たれたのか……」

信二は、思い当たる人物が1人いた。

大輝だ。

彼は1人で捜索に出た。拳銃とバールを持って。鳥円が、何かしらの秘密を知って彼に撃たれた。

そう思えた。

誰かが近づいてくる。

信二はバールを構えた。

百合と中村だった。

「それ、あなた達がやったの？」

百合が鳥円の死体を見て聞いた。

「違います。鳥円は撃たれてます。僕は銃を持っていません」

中村が、金属バットを下ろした。

「とにかく、無事な生徒が居てよかったです」

中村は、普段は野田以上の熱血教師だが、今回は大人しい。

「美術室に他の生存者がいます。」

「なら、行きましょう」

すると、階段から降りてくる足音がした。

「きつと感染者だ！俺が時間を稼ぐ！先に行ってくれ！」

中村は、バットを構えた。

信二とソフィーと百合が、反対の階段に走った。

栗山は、腕の激痛に耐えていた。

栗山は、逃げている最中に腕を噛まれた。それを皆に黙っていた。殺されるかもしれないからだ。

「栗山君？どうしたの？」

海咲が話しかけた。

「大丈夫です」

そう答えた。

だが、腕の激痛が頭まで来た。

その瞬間、彼の目は真っ黒に染まった。

「もうすぐ、美術室です！」

信二は見た。美術室の扉が開いていることに。

「どうしたんだ？」

美術室に入ると、中には誰も居なかった。

「どういう事？」

教室の隅に、誰か倒れている。

「海咲さん！」

ソフィーが駆け寄った。

海咲が首を押さえている。

「どうしたの？」

百合が駆け寄った。

「く・・・栗山よ・・・彼・・・感染者に・・・」

「海咲。喋らないで！」

海咲は、瀕死の状態だった。

「彼が・・・発症・・・して・・・わた・・・しに噛み付いて・・・扉を・・・開けたの」

なんてことだ！

「たく・・・さんの・・・感・・・染・・・者が・・・入ってきて・・・皆・・・どこかに・・・逃げた」

つまり、皆まだ生きてるのか

「もう喋らないで」

「信二……私は……感染してるの……一思いに……殺して」「無理だ！」

「お願い……殺して」

「俺には無理だ！」

「奴らの仲間に……なんか……なりたくない」

ソフィーは、海咲の目を見た。左目は真っ黒だ。

「わかった……」

信二はバールを構えた。

海咲は目を瞑った。

「母さん……父さん……父さん……会いたいよ……そばにいて……」

「覚悟は……」

海咲はうなずいた。

「いくぞ！」

「母さん……父さん……神様……」

信二はバールを振り落とした。

バールは海咲の頭蓋骨を砕き、脳に刺さり、肉片が飛び散った。

信二はもう一度振り落とした。再び、肉片が飛び散った。

ソフィーと百合は、顔を覆い隠した。

「許してくれ……海咲」

信二は殺人を犯した。発症する前の人間を殺した。しかも、鮮やかな殺し方ができなかった。

美術室は、静かだった。普段の生活よりも遥かに静かだった

## 告白

立花は絢輝を連れて、南校舎4階の英語教室に入った。

「栗山君が感染者だったなんて・・・」

「仕方ないさ。言えば殺されると思ったのだろう」

絢輝はそう言ったが、実際は栗山に対して激しい怒りを感じていた。あいつが黙っていたせいで、皆離れ離れになった。

「神よ。お助けください。」

絢輝は、十字架のネックレスを握って祈った。

「絢輝君。あなたは神様を信じているの・・・？」

「ああ」

「なぜなの」

「俺は、キリスト教カトリックに入っている。新約聖書を暗記した。」

「

「すごいわね」

「お前は信じないのか？」

「信じたいわ」

「信じれば？」

「でも信じられない」

「なぜ？」

立花は、考え込んだ。

「この世には理不尽なことが多すぎる」  
確かに。

「殺人事件の加害者は時々死刑になるけど、大体は刑務所か更生院に送られて、刑期が過ぎれば人生をのうのうと過ごせる。けど被害者は人生が他人に奪われる。」  
「まったくだ。」

「国際的な問題が起きてても、政府ではなく国民にばかり負担がかかる。」

「確かにそうだな」

「本当に神様が居たら、何とかしてほしいわ」

「なあ、もしお前に子供が居たとする。」

「それが？」

「お前はその子を自立できるまで育てる。そして自立できるまで育つたら何をやる？」

「自立させて、後は子供に自分で何とかさせて自分は見守る。」

「そうだ。仮に神が居たとする。その神は、人類の事は人類に任せらるだろう。神は見守るだけ。そうすることで、人類は自分達の過ちを自分達で気づかせて、成長させるんだと思う」

「いい考えかたね」

「それに、俺が生まれてきたのも、何億人の中でお前たちと出会って友人になれたのも、全部本当の奇跡だと思う。」

立花は、黙り込んだ。

「・・・祈って・・・」

「え？」

「祈ってほしいの」

紘輝は、十字架を握った。

「イエスは弟子達に言われた。「つまりは避けられない。だが、それをももたらす者は不幸である。」

そのような者は、これらの小さい者の1人をつまづかせるよりも、首にひき白を懸けられて、海に投げられた方がましである。あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。1日に7回あなたに対して罪を犯しても、7回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」「・・・」

立花は、紘輝の祈りの言葉が、子守唄のように感じた。

「・・・声を張り上げて、「イエス様、先生、どうか、私たちを憐れんでください」と言った。ルカによる福音書第17章1節〜13節。」

言い終わった。

「あなたは本当に神様を信じているのね」

「じゃなきゃ、聖書を暗記しないさ。」

立花はくすくす笑った。

「私も暗記できるかな？」

「今いった祈り暗記できた？」

「今思い出してる」

「じゃあ、バスルームへ行つて歯を磨く時間はあるかな？」

立花は、まったくくすくす笑った。

「ユーモアのセンスないと思つてた」

「意外か？」

「ええ」

「思い出せた？」

「ええ」

「言つてみて」

立花は、うる覚えで祈りの言葉を最初から最後まで言った。

「何箇所か違うな。だが、よく1度聞いただけで、覚えたな」

「特賞もらえる？」

「たいしたもんだ」

すると、物音がした。

「隠れる」

立花は、身をかがんだ

絃輝は釘バットを構えた。

聞こえたのは、教室内だ。

「きゃああああ」

立花の叫び声だ。

栗山が、立花に襲い掛かっていた。

くそ！いつの間にも！

絃輝にも、何かが襲ってきた。別の感染者だ。

絃輝は瞬時にバットで殴った。感染者は死んだが、勢いつけすぎて

バットが手からすべり落ちた。

絢輝は、バットを優先せず、右ストレートで栗山を殴った。

栗山は、1発で動かなくなつた。絢輝は釘バットを拾い、栗山の頭を2度打った。

「大丈夫か？」

立花はうなずいた。

「噛まれたか？」

立花は、首を横に振った。

「良かった」

立花に、手を差し伸べた瞬間、死んだと思つた別の感染者が、絢輝の右肩を噛んだ。

「ぐああああああああああ」

感染者は、強く噛んでいた。

感染者が突然倒れた。

立花が、釘バットで殴っていた。

「畜生！噛み付きやがった！」

立花は、絢輝の肩を組んで廊下に出た。

「大丈夫よ。助かる道があるはず。」

「いや、俺は感染した」

絢輝は立花の目を見た。純粹な優しさに満ちていた目だ。

「いえ、きつと助かるはず」

「なあ、どうしてそんなに俺を助けない？」

「それは、」

立花が、絢輝の顔を見て言った。

「あなたの事が好きだったから」

「本当に？」

「あなたは、私の命を何度も救ってくれた」

絢輝は苦痛の声を上げた。

「最初に私を助けてくれた事を覚えてる？」

「ああ。小学校の頃だろ？」

「当時は、あなたは悪ガキだった。いつも私に悪戯をしていた。そんなあなたが、私を助けてくれた。その日から、あなたに惹かれたの」

「何でここで言う？」

「あなたに死んで欲しくないの」

紘輝は、また苦痛の声を上げた。

「実は、お前に悪戯していたのは・・・お前の事が好きだったんだ  
立花は驚いた。

「悪戯は、そんな思いの裏腹だった。すまなかった」

「過ぎたことはいいの」

「だが、お別れだ」

立花の目から、涙が出てきた。

「そんな・・・」

「俺は感染した。もう人間じゃなくなる」

廊下の奥の階段から、多数の奇声が聞こえた。

紘輝の右目が黒く染まった。

「俺が時間を稼ぐ。お前は逃げろ」

立花は、紘輝の顔を見てられなかった。

「映画なら、ここでキスするだろうが、俺は感染してる。変わりに」

紘輝は、自分の十字架ネックレスを取って、立花につけた。

「神様の守りの祈りをしてやる」

「私の神は、御自分の栄光の富に応じて、イエス・キリストによって、あなたがたに必要なものをすべて満たしてください。」

立花は目を瞑って黙って聞いた。

「俺を好きになってありがとう」

「私を好きになって・・・ありがとう・・・」

立花の声は、完全に悲しみに満ちていた。立花は、紘輝を強く抱いた。

「生まれ変わったら、また会おう。」

紘輝の歯が、鋭い歯に変わっていた。

「行け！逃げろ！！」

立花は走り出した。感染者のいない階段へ。

立花とは反対方向から、感染者の集団がやって来た。

「神よ。我に力を」

紘輝は釘バットを持って感染者の集団に立ち向かった。

立花は、悲しみに満ちた思いで、階段を降りていった。

紘輝は、感染者の集団と戦っていた。

その両目はすでに黒く染まっていた

## 遭遇

美術室から出た信二達は、階段から降りてくる立花を見つけた。立花は泣いていた。

「どうした？立花？」

「紘輝君が……」

まさか！

「彼が……」

「感染した？」

立花はうなずいた。

まさか……あいつが……俺の唯一の親友が……

「紘輝君……」

ソフィーはこの事実に大きなショックを受けた。

信二に限っては、事実を受け止められなかった。

「あいつが感染するはずない！」

「真実よ。受け止めなさい」

百合は言った。

「それに、一番つらいのは、あなたでなく、一緒にいた立花さんよ」

信二は、落ち着けと自分に言い聞かせた。

だが

「くそ！くそ！くそつたれええええ！」

と言いながら、美術室の扉を蹴りまくった。

「鳥円、海咲に続いて今度は紘輝か！一体何人犠牲にする気だ！神

は！

「おーい」

中村が来た。

「おい！美術室に居た生存者は？」

「栗山のうんこつたれのせいで行方不明」

「そうか……」

すると、階段から奇声が聞こえた。

栗山仁が、這いずりながら階段を降りてきた。

「あの、世界で最低の糞が!!!」

信二は、這いずる栗山に駆け寄った。

「てめーのせいで!」

バールで背中を殴った。

「海咲が!」

もう一発殴った。

「紘輝が!」

さらに殴った。

「どうしてくれるんだ!!!」

信二は無茶苦茶に殴った。

栗山は、殴られるたびに苦痛のわめき声をあげた。

気が付いたら、栗山の体は原型を留めてなかった。

「はあ・・・はあ・・・」

信二は怒りは沈まなかった。

渡り廊下から、走る足音がいた。

信二と中村は武器を構えた。

だが、ライトの光が3つ見えた。

「生存者か?」

光が近づいてくる。

「隊長!人です!」

3人の正体が分かった。

SATだ。信一とほぼ同じ格好をしている。

「君達、感染してないか?」

全員、うなずいた。

「よし・・・分かった」

3人は銃を下ろした。

階段の上から足音がした。

SAT3人は銃を構えた。

信一だった。

「お前は誰だ？」

「相沢信一。屋上狙撃手だ。」

「なぜ校内に居る？」

「ヘリコプターが墜落してきてな、危機感を感じてとっさに校内に避難した。」

4人とも銃を下ろした。

「まあいい。戦力になる」

すると、渡り廊下から、感染者の軍勢が来た。

「早く美術室の中へ！」

全員、美術室に入り扉を閉め、鍵を掛けた。

扉を叩く音がした。

「あ……あの……皆さんはなぜ校内に居るんですか？」

ソフィーが訊ねた。

「野村博士の護衛で来た。アイビという女性を探しに来た。もっとも博士は行方不明だが」

アイビ……やはり大輝の言っていたことは本当だったのか。

「俺は水谷、隊長だ。隣は石神、副隊長だ。その隣は木馬、新人だ」  
新人とは頼りない。

「それより少年を探してる。」

「どんな特徴だ？」

「小柄で、めがねを掛けている、いかにもオタクって感じの少年だ」  
鳥円か！

「その少年は試験管を持っている。その試験管はとても大事で、それがないと、外に出られない」

「じゃあ。搜索しよう。」

感染者はもう、扉を叩いてない。

扉を開けた瞬間、誰か立っていた。

「野田！」

「連中は突然北校舎へ走って行ったぞ」

急に？なぜだろう？

「とにかく、生存者は多いほうがいい。」

水谷はそう言った。

「体勢を整うよう。俺と石神は先頭に立つ。木馬と相沢は後尾に立つ。」

SAT以外の人は、SATの真ん中に立った。

「まずはこの校舎を搜索しよう。」

信二達は、階段を駆け上がり始めた。

3階

3階の階段の手前にパソコン室があった。

「まずは、この部屋からだ」

石神がドアを開けようとした。

「鍵が掛かってます」

「できるか？」

「単純な鍵穴ですね。できます」

石神がキーピックで鍵を開け始めた。

「この間は警戒態勢だ。」

「もう開きました」

「早いな」

パソコン室に入った。

隊員達と中村が、ライトで部屋中を見渡した。

「パソコン以外何もありませんね」

その瞬間、上の階から音楽が鳴り響いた。

「あの曲は<エール>ですね」

「ああ。いきものかきの・・・じゃなくて止めて来い」

「なぜです？」

「あの音楽を聴きつけて感染者が集まってくるかもしれん」

「俺が行きます」

石神が階段を駆け上がった。

「石神、どうだ？」

『音楽室があります。変ですね。扉が開いています』

「音楽はどこからだ？」

『音楽室です』

「消せ」

『パーティーの最中かも』

音楽が止まった。

『ひき・・・』

「どうした？」

『またあのく化け物>だ!』

「今すぐに行く!」

水谷は、全員を連れて音楽室に向かった。

石神は、廊下に出ていて音楽室の扉を閉めた。

「石神! く化け物>は?」

「音楽室に閉じ込めた!」

「木馬、相沢来い!」

水谷、木馬が短機関銃で、信一が狙撃銃で扉の前で構えた。

「石神、開ける」

石神はゆっくり扉を開けた。

「突入する! 後に続け」

水谷、木馬、信一の順に音楽室に入った。

『石神、何も居ないぞ』

「そんな馬鹿な!」

石神も入った。

信二達も気になって入った。

「確かに中にいたはずだ!」

「でも居ないぞ」

信二は状況を掴めなかった。石神が音楽室でく化け物>を見つけて、音楽室に閉じ込めた。

だが、そのく化け物>は居なかった。

「アレは幻覚じゃなった。」

「でも居ないぞ」

「じゃあ、幽霊を見たとしても言うのですか!？」

「もしくはゴキブリのように逃げたか」

野田は、質問した

「お兄さん達。そのく化け物>は何なんだ？」

石神が説明した。

「顔は、分らん。布切れみたいなのを被っている。手は拘束具をつけていた。片足は鎖をつけていた」

「じゃあ、く化け物>はまだ教室内にいるじゃない」

言い終わると同時に野田が空中に浮かんだ。

野田が天井に居るく化け物>に連れ去られた。

「くそ！撃て！」

<化け物>は野田を連れて、天井を這いながら音楽室を出た。

「本当にゴキブリみたいな奴だ!!天井を這うなんて！」

信二は信じられなかった。

一瞬で野田を連れ去りやがった。しかも天井を這うなんて!

廊下から、感染者の軍団がやって来た。

「扉を閉める！」

木馬は扉を閉めて鍵を掛けた。

本当にこの学校に何が起きたんだ？

<化け物>(前書き)

これまでの登場人物

生徒

相沢信二

ソフィー・ヴェルネ

立花裕香

生徒(行方不明者)

山田太郎

竹田優

生徒(感染者)

岡本紘輝：生死不明

栗山仁：撲殺

上田：生死不明

火野勇也：首の骨折

栗山の兄：生死不明

是田：射殺

生徒(死亡者)

伊藤海咲：撲殺

和真鳥円：直接的な死因は銃撃

野田良助：誘拐

S A T

相沢信一

水谷達也

石神哲也

木馬将也

瀬木一郎

SAT (犠牲者)

火野勇也：自殺

職員

黒木百合

中村大助

黒木大輝：行方不明

職員 (感染者)

川口：首の骨折

自衛隊

前原健二

坂田龍

新田家摸

その他

野村たけし：行方不明

追加登場人物

謎の男・・・27話にて鳥円を射殺一 (この時点ではまだ生存していた) した人物

<化け物>・・・石神が2度遭遇した。他の感染者とは別物の正体不明の怪物

< 化け物 >

音楽室前の感染者の集団が過ぎて行った。

「あの化け物はなんだったんだ・・・」

水谷は、まだ信じられなかった。

「天井を這うなんて・・・」

木馬は震えていた。

「隊長、理科室へ行きましょう」

石神が提案する。

「一体何のために？」

「あそこは、ろくに調査してなかった。もしかしてあの化け物の事を記したファイルか何かあるのでは？」

「賭けてみる価値はありそうだな」

「生存者は音楽室で待機してもらいましょう」

水谷達が出撃準備した。

「待ってください」

信二が言った。

「何だ？少年？」

「何も。あなた達が行く必要は無い」

「どういう意味だ？」

「たぶん、あなた達はここの学校の事をよく知らない」

「確かに。そうだな」

「でも、俺はこの学校をよく知っている」

「そうだな」

「あなた達は感染者と遭遇したら、戦ってしまっ」

「場合によっては」

「俺が行きます」

水谷は、驚いた。

「だめだ！危険だ」

「では、もしあなたが感染者と遭遇して逃げようとする」

「ああ」

「でも、重い装備で身軽に動けないし、速く走れない」

水谷は、信二の言い分が正しいことに気づいた。

「でも、俺は身軽だから、感染者から逃げ切れる自身はある。」

水谷は、考え込んだ。

「それに、俺はこの学校の事をよく知っている。いざとなれば教室に逃げ込めばいい。」

「だが・・・」

「それに、あなた達は大人だ。大人の体格では入れない場所もある。」

「

「だが、それでも危険すぎる」

「俺は大丈夫です」

水谷は、考え込んだ。こいつの勇氣は認めよう。こいつの言い分も正しい。ここは・・・

「分かった、任せよう。無線と拳銃を渡す。何かあったら無線で連絡を取ってくれ。」

「分かりました」

「助けが必要になつやら、無線で位置を教えてくれ。助けに行く」

「分かりました」

「そういえば」

木馬が言い出した。

「そういえば？」

「あそこの部屋の資料は、確か全部外国語だった」

「英語か？」

「いいえ。たぶん、スペイン語かタガログ語か、分かりません」

困つたな。SAT全員、英語は分かるが、それ以外の言語は分からない。

「なら、私もついて行く」

ソフィーが、名乗りをあげた。

「ソフィー？」

「私は、親に外国語を勉強されました。英語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、タガログ語など」

「じゃあ」

「たぶん読める」

「よし。信二、ガールフレンドをちゃんと守れよ」

「無事に戻れよ」

ボール、拳銃、無線を持った信二とソフィーは音楽室から出た。鍵が閉まる音がした。

信二とソフィーはまず、渡り廊下へ向かった。

半壊したバリケードを越え、理科室へ向かった。

何も出会うことなく、理科室にたどり着いた。

「変だな・・・」

「何が？」

「感染者がまつたくつていいほど居なかった。」

「こつちには都合がいいじゃない」

「まあな」

理科室は開いていた。

慎重に中を見たが、何も居なかった。

すぐに理科室に入り、ドアを閉め、鍵を掛けた。

理科室の奥にまたドアがあった。

2人は、マッドサイエンティストっぽい部屋に入った。

「うわ・・・B級ホラーのマッドサイエンティストの部屋だよ」

ソフィーが言った。

確かに気味が悪い。

信二は、パソコンを乗つけた机を見つけた。

引き出しに、資料ファイルと書いてあった。

机の上には、沢山の資料が散らばっていた。

全部外国語で書かれている。英語じゃないのは確かだった。

「何語だ？」

「すごいよ！英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、タガログ語、とにかく色々！」

こいつ・・・本当に天才だな。

「この人は天才だよ！」

「ああ、大輝先生は天才だ。」

「え？何で分かった？」

「資料の最後には、ローマ字で大輝と書かれてる」

「本当だ」

「この資料には、ブラックツリーと書かれてる。ブラックは黒、ツリーは木。だから、黒い木・・・黒木」

「確かに・・・」

信二は引き出しを開けた。中には、ファイルが山のようにある。全部取り出した。

「1つ1つのファイルの題名を見て、怪しいものがあつたら言ってくれ」

ソフィーはファイルを確認し始めた。

引き出しの奥に、ディスクとテープがある。近くに録音機があつた。信二は録音機のテープを入れ替え、再生を押しした。

「恐れていた事態が発生した。アイビが逃げ出した。学校内に居るのは確かだが、見つからない。」

さらに、タイプ2とタイプ3の試験管が割れていて、ネズミがそれを食って逃げ出した。このウイルスは異種への感染は無いが、ネズミの体に付着したウイルスが、ネズミを通して霊長類に感染する恐れがある。近いうちに「バイオハザード」が発生する危険性がある。

テープはまだ続いた。

「ネズミ達は、学校に巣を作っていることが判明した。バイオハザードを最小限に食い止められる。」

だが問題はアイビだ。彼女が消えて1週間が経つ。一体どこに居るんだ？」

信二は、自分の心から、怒りが溢れるのを感じた。

『……アイビだ！アイビが天井を這っている。ありえない！ゴキブリ並みの速さだ！麻酔銃で捕獲しようとしたが失敗した！彼女が今もこの学校に居る！』

『……終わりだ。ついにバイオハザードが発生した。このことを予測して、情報を自衛隊と警察に漏らしたのは正解だった。もうすぐこの学校は特殊部隊封鎖される。この学校の生徒には悪いが、大流行を防ぐための犠牲になってもらう。恐らく半日で生徒の大半は感染するだろう』

『また雑音だ。』  
『もはや、この学校は絶望的だ。生徒の3分の1は感染した』  
再び雑音

『……非感染者はもう少人数だ。しかも栗山という生徒が発症し、皆行方不明だ。もう誰も助からない。何もかも終わりだ。SATが突入したようだが、何もできずに死ぬだけさ』  
そして、テープが止まった。

信二は最初まで巻き戻し、今までの記録を無線だ水谷達に聞かせた。

『まさかな……こんな事になるなんて』  
全員動揺していた。

『信二君！あつた！怪しい資料が！』

『読んでくれ！』

『で……デモニーウイルスは……適合した感染者を……進化させる……それがオリジナル』

『続けて』

『たいがい……えくと……たいがいの感染者は適合あるいは……えつと……ウイルスによる強制進化に耐えられずに……ただ狂暴化するか、死亡する。アイビは……唯一の適合者だ』  
適合者？

「アイビは・・・最初こそは、理性を保ったが・・・時間が経つにつれ・・・知能が低下した」  
なるほど。

「分かりましたか？水谷さん」

『ああ。もう戻れ』

言われなくても。だが、理科室を何者かが開けようとしている。

「隠れる！」

信二は小声で言った。

「でもどこに？」

「エアダクトがある。そこに入るう」

信二はソフィーにエアダクトを最初に入らせた。信二が入ると同時に、理科室の扉が開いた。

信二は、エアダクトの入り口から部屋を見渡した。

顔を覆い隠すマスクを付けた自動拳銃を持つ男が、部屋に入ってきた。

男は資料を荒らし始めた。

信二は、拳銃を構えた。

男が、机や椅子などを蹴って苛立ちを見せる。

部屋にはお求めの物が無かったらしく、すぐに出て行った。

信二は、男が出て行った数分後にエアダクトから出た。

「あいつは何を探してるんだ？」

「これじゃない？」

ソフィーは分厚いファイルを見せた。

「何だそれ？」

「デモニーヨウイルス・オリジナルタイプって書いてある」  
なるほどね

「とにかく、そのファイルを持って音楽室に行こう」

2人は理科室から出た・・・瞬間にソフィーが天井から首を絞められる。

「うっぐー！」

<化け物>だった。

「くそ！」

<化け物>は凄まじい握力でソフィーの首を絞めていた。

信二はボールで<化け物>の右腕を殴った。

<化け物>はうめき声を出してソフィーを放した。

<化け物>は、天井から降りて、二本足で立った。信二と<化け物>が対峙した。

信二は、改めて恐怖を感じた。

<化け物>の姿は異様だった。顔には布切れ・・・ではなく、人の顔の皮を沢山顔につけていた。素顔はできないが、人の顔の皮で作られたマスクに裂け目ができていて、その裂け目から左目が見える。目は、本来白い部分は黒く、瞳は赤かった。青い服を着ていて、所々破れていた。両腕は拘束具を付けており、左足は足枷あしかせを付けていた。まるで囚人だ。左肩は露出していた。

本来なら、肩の露出は嬉しいことだが、この<化け物>の左肩は、大量の目玉が、ぎよろりとしていた。両手両足は猛獣のような爪が生えていた。

「本物の化け物だ・・・」

信二は今日見てきたどの感染者よりも恐ろしく感じた。

<化け物>は本当に恐ろしい奇声を上げた。

「怪物め！」

信二がそう言くと、左肩の目玉達が、信二を直視した。

気持ち悪い。信二はそう思った。

<化け物>は信二に走りかかった。

信二はボールで殴ろうとしたが、向こうは両手の拘束具で跳ね返した。

ボールは信二の手から滑り落ちた。

信二は拳銃を構えた。

だが<化け物>は、ジャンプして天井に張り付いた。

「くそ」

信二は狙いを定め、引き金を引いた。

だが、思ったより反動が強く、1発目は、目標を大きくはずした。

<化け物>は天井を這い、信二の目の前で降りた。

信二は拳銃で応戦しようとしたが、向こうは拘束具で、信二の頭を殴った。

殴られた信二の意識が飛んだ。

化け物は、信二の右足を掴み、どこかへ引きずり連れて行くつもりだ。

信二は意識を取り戻したが、体が思うように動かなかった。

もう駄目だ！信二はそう思った。

だが、<化け物>は突然信二を放し、苦しみだした。

良く見れば、背中から煙が揚がっていた。

「大丈夫!？」

ソフィーが駆け寄った。

「お前、一体何をした？」

「理科室の薬品の1つ、硫酸を投げてやったの」

「ナイス・・・拳銃を拾ってくれ」

ソフィーは信二に拳銃を渡した。

背中の服が溶け落ちて、背中が露出した。背骨がむき出しになっていた。

<化け物>は信二達に向いた。

首にドッグタグらしい物が付いていた。信二はその名前を確かに見た。

<化け物>は天井に張り付いて、這って逃げて行った。

「あの化け物は一体何？」

信二は立ち上がり、答えた。

「あれが<アイビ>だ」

<化け物>(後書き)

グランド

自衛隊員が、テントに入った。

「報告します。前原一等陸佐殿」

「報告しろ」

「心臓麻痺で新田が死んだ」

「!?!」

## 突破

2人は音楽室に戻った。

「大丈夫か？」

信一が真っ先に聞いた。

「化け物の正体が分かった」

「本当か？」

「アイビだ」

SATは信じられないと言う顔をした。

「つまり・・・あの化け物の血液を採取しない限り、ここから出られない」

水谷が冷静に言った。

すると、扉を誰かがノックした。

「助けて！」

山田の声だ！

信二は急いで扉を開いた。

山田、竹田が居た。

「大丈夫か！？」

山田は落ち着きを取り戻した。竹田は疲れて寝ていた。

「他に誰と来た？」

「途中まで大輝先生と居た」

水谷は質問した。

「今どこに！？」

「渡り廊下で、感染者と戦っている。」

「隊長！捕まえましょう！」

信一を残して、SATが廊下へ出た。

数分後

水谷達が大輝を連れて戻ってきた。

水谷は、大輝を椅子に座らせた。

「知っていることを全部話せ」

水谷が言った。

「何をだ？」

「とぼけるな！」

石神が銃で殴った。

「やめろ！石神！」

「でも隊長！」

「今はやめろ！」

水谷は聞きなおした。

「知っていることを全部話せ」

「お前達を知ることはない」

「あなた」

「百合……」

「話して。お願い」

大輝は深く息を吸った。

「分かった……何を話せばいい？」

「アイビの事。オリジナルタイプの事を」

「オリジナルタイプのデモニーウイルスは、これまでのウイルスとは違った存在だった」

「どういう意味だ？」

「デモニーウイルスオリジナルDVOは感染者と適合できれば、細胞、遺伝子、神経、身体能力など、全ての生体を突然変異……いや進化させるんだ。」

「そんな事が可能なのか？」

「今だ解明されてない部分が多い。つまり、謎だらけだ。自然発生したのか、人工的に開発されたのか、まったく不明だ。」

「まさに謎のウイルス」

「そもそもウイルスなのかも分からない」

「どういう意味ですか？」

「ウイルスは本来、細胞を持たない無生物だ。だが、DVOは細胞を持っている。」

「変異型は？」

「ない」

段々頭が混乱しそうだ。

「アイビは？」

「アイビは、DVOの唯一の適合者だ。猿で実験したが、全部適合せずに狂暴化か、適合してもウイルスの強制進化に耐えられずに死亡するかどちらかだ。」

「つまりアイビは進化したと？」

「これからも進化する」

音楽室の扉に誰かノックした。

「誰か居ませんか？」

野村の声だ。

水谷達は、扉を開けて、野村を中に入れた。

「博士！今までどこに？」

「そんなことよりも、少年は？」

「見つかりません」

「なら、アイビを探しましょう。」

「アイビを居場所を？」

「アイビの棲家なら知っているぞ」

答えたのは大輝だった。

「この学校の地下に居る」

「行き方は？」

「エレベーター」

「エレベーターは北校舎にある」

「皆準備しろ！」

全員、準備し始めた。

信二は大輝に駆け寄った。



信二と竹田以外は、エレベーターに向かった。

「僕は自爆する」

「よせ！やめろ！」

だが、竹田はマッチで点火した。

巻き添えを恐れた信二が走り出した。

「死んでいった友人達の仇だ！」

竹田はダイナマイトを付けた消火器で感染者の集団に立ち向かった。

信二は走っている最中に爆音を聞いた。

「早く！信二君」

全員、エレベーターに乗っていた。

信二はエレベーターに乗った。

大輝は、地下2階のボタンを押した。

エレベーターの扉が閉まり始めた。

大勢の感染者の腕がエレベーターの扉に挟まった。

「死にやがれ！」

石神が、扉の隙間に短機関銃で乱射した。

だが、1人の感染者の腕が信二の腕を掴み、引っ張った。

「信二君」

ソフィー、立花、百合が信二のもう片方の腕を掴み、引っ張った。

水谷、石神が短機関銃で、信一が狙撃銃で、大輝と野村が拳銃で扉の隙間を撃った。

だが、信二は感染者達に引っ張られていた。

「踏ん張って！きつと助ける！」

ソフィーが叫んだ。

「くそ！駄目だ！持たない！」

信二は、感染者達に扉の向こうへと連れてかれた。

扉が閉まり、エレベーターが下り始めた。

「信二君！」

ソフィーは叫んだ。

だが、信二は感染者に連れて行かれた。その瞬間を見た。  
ソフィーの悲しみが頂点に達した。  
目から涙が流れ始めた。

「信二君……」

立花は、もう泣きたくても泣けなかった。

エレベーターは静かに、下った。

## 闇

エレベーターの扉が開いた。

そこは、真つ暗な空間だった。

全員、フラッシュライトと懐中電灯を点けた。

ライトの光だけが、頼りだった。

「子供達はエレベーターに残れ」

水谷はそう指示した。

「百合、お前も残れ。子供達を頼む」

そう言つて男達は行つた。

「行つちやつたね」

山田は呟いた。

「後は男達に任せましょう」

百合は言つた。

ソフィーはずつと下を向いて泣いている。立花は放心状態だ。山田は顔には出してないが、心では泣いている。

まったく酷いものね。百合はそう思った。

すると、暗闇から音がした。

「先生、ちよつと見てくるね」

百合は、懐中電灯とバットを持って、闇の中へと消えた。

3分以上が経過した。

「先生・・・遅いわね」

放心状態から戻つた立花が言つた。

「確かにね」山田はそう答えた。

「ちよつと、行つて来る」

立花は、懐中電灯を持って闇に入った。

立花は、懐中電灯の光を頼りにまっすぐ進んだ。しかし本当に暗いわね。

光から、特殊な装置や医療器具が見えた。恐らく研究室ね。  
立花の手には信二の物だったボールがあった。  
途中で何かにつまづいて転んだ。

「痛っ」

立花は、つまづかせたものを懐中電灯で照らした。

その瞬間、吐き気が襲った。

百合の死体だった。

喉笛を食いちぎられていた。

立花は後ろから、気配を感じた。

勇気を振り絞って後ろを振り返りボールを構えた。

だが、すぐに戦意喪失した。

「あなたは・・・！」

水谷達は、暗闇を進んでいた。

「全員待つてください！」野村が叫んだ。

「どうした？」

「音がしました」

全員、銃を構えた。

「どこからした？」

しばらく沈黙がした。

「私は見てきます。先に進んでください」

野村はそう言つて、どこかへ消えた。

「仕方がない。先へ進むぞ」

SAT達は、大輝に誘導された。

エレベーターの山田は、不安を感じた。

百合に続いて立花も戻つてこない。ソフィーは相変わらず泣いてい  
る。

「大丈夫だよ」

山田は慰めた。

だが、山田が何かに殴られた。

山田の意識が飛んだ。

ソフィーも、山田と同じ状況に陥った。

## 怪物との死闘

信二は、はっと目を覚ました。

目覚めれば、ベッドの上だ。

「今までののは夢だったのか・・・」

信二は突然笑い出した。

「はは・・・おかしな夢だった・・・ははは！」  
だが再びはっとした。

「俺の部屋じゃない！」

信二の寝ていたベッドは天蓋付きだった。よほどの金持ちでない限り普通はない。

それに部屋が、教室2つ分ある。暖炉もある。薪が新しい。

「どういうことだ？」

信二は記憶をたどった。

確か・・・最後の記憶は感染者に連れて行かれた・・・

「俺は死んだのか・・・」

「じゃあ、ここは天国か？」

「死ぬのも悪くない・・・」

信二は再び眠りについた。

立花は、エレベーターまで走った。

「まさか！感染者がここまで来てたなんて！」

エレベーターの光が見えた。

「だが、ソフィーと山田は居なかった。

「なぜなの！？なぜ居ないの！」

感染者が近づいてくる足音が聞こえる。

「もう！」

また走り出した。

エレベーターで上に戻ろうと考えたが、もし大勢の感染者が扉の前

で待ち構えていたら・・・

無我夢中で走っていた立花だが、壁にぶつかった。

「痛っ！行き止まり・・・？」

懐中電灯を照らしてみると、ドアだった。

「もしかして！」

ドアノブを捻ってみると、見事にドアが開いた。

「やった！」

だが、感染者が近くまで近づいていた。

立花は部屋に入り、ドアを閉めて鍵を掛けた。

部屋の電気が点いていた。

中は本屋のように広く、沢山の本棚と本があった。

「第2図書室かな？」

そう考えていると、ドアの叩く音が聞こえた。

「隠れなきゃ！」

立花は、第2図書室・・・だと思っ部屋の隅へ行き、本棚に隠れた。

ドアの叩く音がなくなった。

「行ったかな？」

立花は目の前の本の題名を見た。

<人間が死ぬとき>

「縁起が悪い・・・」

立花は後ろを見た。

「またドアだ」

鍵は掛かっていない。開けてみると、長い1本通路があった。

「怖いけど行ってみよう・・・」

「まだですか？」

水谷は大輝に質問した。

「目の前にドアがある。簡単な鍵だ。開けてくれ。」

「石神」

「分かっています」

石神はキーピックを出した。

「どれくらいかかる？」

「暗いので、相当」

「なるべく早く」

石神が作業している間、残りの全員は警戒態勢に入った。

「石神、まだか？」

「もう少し・・・」

カチッ

「開きました！」

「よし。突入！」

全員、部屋の中に入った。

中は明るかった。

「ここは？」

「実験室だ」

中は、実験用具ばかりあった。部屋の東側の壁がなく、手すりがあった。

「このさ・・・」

大輝が言い終える前に何者かに飛び乗られ、手すりを越えて転落した。

「大丈夫か！？」

水谷は手すから、下を見た。

下の空間は闇が広がっていて、何メートルあるか分からなかった。

「くそ！案内人ガイドが落っこちた」

だが、何かが壁を這ってあがってきた。

「まさか・・・！」

アイビだった。

「全員銃を構えろ！」

水谷は、手すりから離れ、短機関銃を構えた。

「隊長！何がいたんです？」

「あのく化け物>だ」

アイビは手すりを越えて、実験室に侵入した。

「全員撃て！」

水谷が言い終わる前に既に全員、撃っていた。

だが、アイビはジャンプをし、天井に張り付いて弾丸を避けた。信一は狙撃銃で狙いを定めた。アイビの頭を正確に狙った。

「チエックメイトだ。糞デビルゾンビ！」

引き金を引いた。

「勝った」

カチッ

銃口から火花は出ず、弾丸も出なかった。

「くそつたれ！弾詰まりだ！弾が詰まった！」

水谷と石神が銃を撃った。

だが、アイビは天井を這って避けた。

「逃げ切ると思うな！」

石神が短機関銃を乱射した。

アイビの背中から血が噴出した。

アイビは、人間離れた悲鳴を上げて床に倒れた。

石神は、アイビに近づいた。

「死んでます。13発の弾丸を食らいました」

石神は報告した。

「じゃあ、注射器を探して、血が固まる前に採取しよう」

「はいたい・・・うわああああああ」

石神が、何かに足を引っ張られた。

アイビだった。

アイビは石神を引きずってダクトに入った。

「石神！」

水谷は、石神の腕を掴んで引っ張り出そうとした。

アイビは凄まじい力で引っ張っていた。

「隊長！俺は死にたくない！」

「大丈夫だ！死なない！」

「隊長！！早く引つ張つてくたさい！お願いだ！死にたくない！」  
水谷は必死に引つ張った。信一も手伝った。

「ぐあああ！糞！足を噛まれた！感染した！」

「大丈夫だ！ワク・・・」

石神の手が、水谷から滑り抜けた。

「隊長おおおお」

「石神！」

水谷はダクトを覗いた。

「生きて食われるよりはマシだ！」

水谷はダクトに短機関銃を乱射した。石神に当たったかは不明だ。

「木馬！なぜ手伝わなかった！」

水谷は木馬に怒鳴った。

「隊長が命令しなかったから・・・」

水谷は一喝した。

「お前は小学生か！命令しなくても見れば助けが必要だと解るはずだ！！」

木馬は下を向いて黙り込んだ。

「人が話しているときは目を見る！！それでも特殊部隊隊員か！？」

水谷はヘルメットを脱いだ。

「これが現実か！？」

水谷は、近くの椅子を蹴り飛ばした。

信一は、水谷の肩を叩いた。

「今日1日で部下を2人も失って取り乱す気持ちは分かる。だが取り乱すな。今すべきことを考える」

水谷は、少し落ち着いていた。

「・・・そうだな・・・」

「それに俺は弟を失った。気持ちはお前と同じだ」

水谷は冷静を取り戻した。

「そうだ。こいつは家族を失った。俺よりもつらいはずだ。」

「悪かった。取り乱して」

信一は注射器を持ち出した。

「奥に扉がある。あの糞を探し出そう」

信一は短機関銃を構えた。

「狙撃銃は？」

「壊れた」

水谷は装填した。

「木馬！今度は命令が無くても独断で判断しろ！」

「は、はい！了解！」

3人のSATは奥のドアを開けようとした。

「鍵が掛かっている。」

「どけ」

水谷は拳銃で鍵を撃ち壊した。

中はまた闇の空間だった。

「今度こそは」

立花は1本道を歩き終え、奥の扉にたどり着いた。

「大丈夫よね」

扉を開いた。

部屋は何も無い広々とした空間だった。

部屋を中心に何か倒れている。

「あの人は！」

石神だった。

立花は石神に駆け寄った。あちこちに食いちぎられた痕があった。

「しっかりしてください！」

立花は体を揺らした。

「だ・・・誰・・・だ。隊長か？」

「違います」

「この甘い声・・・ああ・・・立花・・・だっけ？」

「はい」

石神は顔を上げようとしたが、力が入らなかった。

「何も・・・見えないな・・・」

「喋らないでください」

「た・・・頼みが・・・あ・・・る」

「何ですか？」

「ほ・・・ホルスターから・・・拳銃を・・・出してくれ・・・手に・・・感覚が無い」

「わ・・・私には無理です」

「お前には撃たせない・・・そんな重荷を・・・」

「どういうことですか？」

「お・・・俺は感染してる。このままくたばればいいが・・・その前に発症しそうだ・・・」

「自殺する気ですか!？」

「ほ・・・本来自殺はいけませんが・・・神様も赦してくれるさ・・・」

石神は黙り込んだ。

「大丈夫ですか？」

「お・・・おかしいな・・・左目が見えるぞ・・・」

立花は、石神の左目を見た。

瞳が真っ赤に光っていた。

「は・・・発症して・・・るか？」

嘘をついてもしかたない・・・

「はい・・・」

「そうか・・・だから見えてるんだ。」

石神は立花の顔を見た。

「可愛い顔してるな・・・俺の妹みたいだ・・・」

「妹さんは？」

「死んだよ・・・中学生の頃に無差別殺人に巻き込まれて・・・」

立花は同情した。

「頼む・・・人間として死にたい・・・拳銃をくれ・・・」

立花は拳銃をホルスターから抜いて、石神の左手に握らせた。

石神は最後の力を振り絞って拳銃を自分の頭に向けた。

「見るな・・・あつち向け・・・15歳以下鑑賞禁止だ・・・」  
立花は後ろを向いた。

「ありがとう・・・立花ちゃん・・・」

石神は実の妹に話しかけるような愛想の良い声でお礼を言った。

「頭痛がする・・・死ぬのが怖い・・・日名子ひなこ・・・そばにいてくれ・・・」

一瞬沈黙が続き、そして銃声になった。

## 遭遇

信二は再び目覚めた。

場所は相変わらず、見知らぬ部屋だった。

「やはり死んだんだ」

だったらここは天国か？それとも地獄か？

「考えるのはやめよう・・・」

再び眠りに付いた。

立花は石神の死体から、拳銃を取った。ベルトから予備の2つの弾倉を取った。

「・・・武器は多いほうがいい・・・」

広間の奥にまた扉があった。

「行ってみましょう」

だが、先に立花が通った一本道から足音がした。

きつとあの感染者がドアを破って追いかけてきたのだろう・・・。

そう思った立花は、拳銃を構えた。

拳銃は重かったが、どうにか構えた。このまま逃げる選択もあった

が、後で面倒になりそうだった。

感染者が姿を現した。

その姿を見た瞬間、この広間が凍りついたような感覚になった。

立花にとって、この感染者の姿はアイビよりも恐ろしかった。

「絃輝君・・・？」

絃輝が立っていた。真っ黒に染まった目で立花を見つめていた。

知らなければ良かった・・・待ち伏せなんかしなきゃ良かった・・・

立花はそう後悔した。

絃輝は、人間離れた奇声を上げた。開いた口に並ぶ鋭い歯が、も

う彼が人間ではないことを物語っていた。

「絃輝君・・・」

自分の名前を言われた絃輝は、立花をじっと見た。襲ってこなかった。

「絃輝君！私を覚えているの？」

絃輝の目から、殺意が無くなるのを立花は感じた。もしかしたら・

・  
「絃輝君！私よ！立花よ！」

絃輝は首を傾げた。多少うなり声を出していた。

「絃輝君！わた・・・」

言い終える前に絃輝がわめき声を上げながら、真っ直ぐに立花に向かった。

立花は反射的に銃を撃ったが、反動が強く、頭から大きく外れた。2発目を撃とうとしたが、絃輝は立花に掴みかかった。

立花は、絃輝の右脚を撃った。弾丸は皮膚を貫き、骨を粉碎した。

絃輝は倒れこんだ。

立花は絃輝の頭を狙った。

「絃輝君！正気に戻って！お願い！」

だが、倒れている絃輝は立花に向かって奇声を上げていた。

「・・・ごめんなさい・・・！」

引き金を引いた。拳銃は火を噴いた。

絃輝の頭から、血と肉片が飛び散った。

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

立花は座り込んだ。絃輝は完全に死んでいた。

「隊長！扉です！」

SAT達は扉の前に立った。

「よし！入ってみよう」

扉を開けてみた。

そこは、沢山の生徒の死体が並んでいた。全員、顔が剥がれていた。

「うっ！」

木馬は吐き気に襲われた。

「奥に扉がある・・・行こう」

3人は奥の扉まで進んだ。

「入ろう」

信一は扉を開けた。

中は、3つの扉があつた。

「丁度3人・・・俺は真ん中、木馬は左、相沢は右に進もう」

3人は、それぞれの扉を開けて、中に入った。

物音に気づいた信二は目を覚ました。部屋の真ん中に誰か3人が立っていた。

「目を覚ましたか・・・信二君」

信二は声の主を見た。

「野村さん！」

野村が拳銃を持って立っていた。その後ろにソフィーと山田が縛られて、口にガムテープをつけられていた。

「2人とも！」

「おつと来ないでくれ！」

野村は2人に銃を向けた。

「来たら2人の命はないぞ」

畜生！何が起きてるんだ！

信二はゆっくりベッドから降りた。

2つ分かったことがある。1つは俺は死んでない。2つ目は野村が裏切り者だな！

「何がしたい！？」

「ファイルをやこせ」

野村はそう答えた。

「ファイルって何のファイルだ？」

「山田君が君が持っていると言った」

山田め！

「持ってないぞ」

「じゃあ2人は殺そう」

「待て！待ってくれ・・・」

信二は自分のブレザーの懐を触ってみた。確かにファイルはある。

「なぜファイルが欲しい？」

「ワクチンの製造方法が書かれているはずだ」

「なかったぞ」

「嘘だ！」

野村は拳銃を構えた。その時、野村の後ろのドアが開いた。

「野村博士！何を！？」

木馬だった。

「邪魔だ。失せろ」

野村は拳銃を撃った。弾丸は木馬の胸の真ん中に当たった。

「防弾ベストはつけてなかったようだな」

木馬は倒れた。

「お前！どうしてそこまでしてワクチンを作りたい！？」信二は質問した。

「ウイルスとワクチンを売るのさ」

「どこに？」

「欲しがる奴にさ」

「どうしてワクチンまで？」

野村は頭を掻きまわった。

「ウイルスとワクチンは常にセットでなければ高額で売りつけられない」

狂気の沙汰だ！

「金持ちになりたいのか？」

「そうだとも」

信二の後ろに扉があった。そこへ逃げよう！だけどそうしたら2人は死ぬ。

その時、後ろの扉が開いた。

「野村博士！」

水谷と信一だった。

水谷は、木馬の死体を見た。

「糞野郎！木馬を殺したな！」

2人は短機関銃を構えた。

「待て！今すぐに下ろせ！このガキ2人を殺すぞ！」

水谷達は、ソフィーと山田を見て短機関銃を下ろした。

「ゆっくりと銃を床に置け」

2人は言われたとおりにした。

「銃をこちらに蹴れ」

2人は短機関銃を蹴り飛ばした。

「そうだとも。そうだ。さあ信二君、ファイルをよこせ」

信二は言われたとおりにファイルを渡した。

「ありがとう・・・もう子供達には用が無くなった」

野村は2人に拳銃を向けた。

「やめろ！」

2発の銃声が鳴り響いた。

ソフィーも山田も無傷だった。

野村が倒れた。両足脚にドングリサイズの穴があった。

立花だった。立花が野村の足を撃つたのだった。

「糞！」

野村は拳銃を立花に向けたが、立花は野村の右肩を撃つた。

「ぐあっ！」

野村は拳銃を落とした。水谷と信一はすぐに短機関銃を拾い、野村に構えた。

信二と立花はソフィーと山田の縄を解き始めた。

「いつから拳銃が使えた？」

「聞かないで」

2人は2人のガムテープを剥がした。

「野村博士。あなたを逮捕する」

水谷は手錠を野村につけた。

だがその時、天井から何かが飛び掛ってきた。全員、反射的に避けたが、野村は何かに掴まれた。

アイビだった。素顔を露出している。素顔は骸骨のようだった。

「助けてくれ！」

アイビは野村を掴み上げて、暖炉に投げた。野村の全身が燃え出した。ファイルと共に・・・

「撃て！撃て！」

水谷と信一は短機関銃を連射した。だが、アイビはいくら撃たれても死ななかった。

アイビは信二に飛び掛った。信二はソフィーを庇った。その時、信二とソフィーの床が抜けた。

2人は落ちた。アイビは抜けた床に入った。

「信二！」

信一は部屋を見渡した。ベッドの横に階段があった。

「助けに行こう！」

## 決着

信二は目を覚ました。起き上がろうとしたが、後頭部に激痛が走る。「つつつ！」

頭がクラクラする。何があつたのだろうか？

信二は左手で何か掴める物を探した。何か丸い物を掴んだ。

「何だこれ？」

信二の掴んだものは柔らかく、感触が良く、触り心地がいい。

だが、すぐに何かに叩かれた。その衝撃で視力が戻った。

「変態！」

ソフィーだった。鬼の形相をしている。

「ソフィー・・・なぜそんなに怒ってる？」

信二は理由を考えた。女があんなに怒るのは・・・もしや！

「まさか・・・<あそこ>を揉んじまったのか・・・俺？」

ソフィーはコクリとうなずいた。

なんて事だ・・・遂に俺の人生も汚れちゃった・・・

「すまない。ソ・・・」

信二が言い終える前にソフィーが押した。押された信二は床に倒れた。

「何するんだ!?!」

信二の居た床に何かが落ちた。

「何だ？」

信二は直視した。

「まさか！」

アイビだった。

「くそ！逃げるぞ！」

アイビの両腕を封じていた拘束具は無かった。つまり、アイビの両腕は自由になっていた。

アイビは四つん這いで信二に走ってきた。あまりの速さに信二は驚

いた。

速過ぎだ！このままでは食われるか、噛まれる！

本能がそうしたのか解らなかったが、信二は無意識にしゃがんだ。信二の頭上をアイビは通り過ぎた。アイビは飛び掛ったのだった。

「あつぶね〜」

だが、アイビは再び飛び掛った。今度は避けられなかった。信二は床に倒れ、アイビがのしかかった。

アイビは牙を信二に向ける。

もう駄目だ・・・お終いだ・・・。そう思った矢先、アイビは突然信二から離れた。

信二はアイビを見た。

ソフィーが、バットくらいの大きさの鉄パイプでアイビを殴っていた。

「この！この！この！」

ソフィーはアイビの頭や背中を集中的に殴っていた。

アイビはソフィーを掴みかかった。

信二はアイビに向かって全力疾走した。そしてカー杯タツクルを繰り出した。

2度目の不意打ちを受けたアイビは、信二に狙いを定めた。

そして、信二が反応できないスピードで信二の目の前までジャンプした。

「まず・・・」

信二はアイビに両腕で首を？まれ、持ち上げられた。

ソフィーは鉄パイプを拾い上げようと手を伸ばしたが、腹を右足で思いつき蹴られた。そして、3メートル先の壁に叩きつけられた。ソフィーの口からうめき声が漏れた。

信二は右腕に力を溜めた。狙いはアイビの左頬。信二は思いつきり殴った。

パンチはアイビの左頬に命中したが、鉄パイプほどの威力が無かったため、アイビは怯みこそはしたが、両腕は離さなかった。

アイビが牙を剥き出しにした瞬間、信二は自分の短い人生に終わりを感じた。

だが、アイビは信二を噛み付かなかった。信二の顔を見つめていた。信二はアイビの考えを推理した。

俺をどう殺そうとしてるのか考えているのか？

だが、アイビは信二を放した。信二は、床に倒れ、力が入らなかった。

アイビは、壁に叩きつけられ、倒れていたソフィーへと向かった。

「やめる！」

信二は立ち上がるうとしたが、本当に悪いタイミングで右足が攣った。

「くそ！」

信二は右足を引きずりながらアイビに向かった。

だが、アイビはソフィーの首を両腕で締め上げた。

「畜生！間に合え！」

だが、ソフィーの悲鳴が聞こえた。

「ソフィー！」

1発の銃声が部屋に鳴り響いた。

アイビの右腕が吹き飛んだ。アイビは絶叫を上げながら床に倒れた。

信二はソフィーに駆け寄った。

ソフィーの右肩から大量の出血をしていた。アイビによって右肩を噛まれたのだ。

「感染したのか」

信二は後ろを振り向いた。

「大輝先生！」

大輝が散弾銃ショットガンを持って立っていた。

「その銃は？」

「ああ、ベネリだ。狩猟用の散弾銃をちょっと改造した。日本でも免許さえあれば購入できる・・・かも」

「かも？」

「狩猟友人から譲り貰った」

信二はソフィーを隠すように立った。

「その散弾銃でソフィーを撃つのですか？」

「そいつが感染・・・ぐあああ！」

言い終える前に、大輝が叫んだ。

アイビが後ろから大輝の左肩を噛み付いた。大輝は振りほどいた。

アイビは再び大輝に噛み付こうと口を大きく開けた。大輝を散弾銃の銃口をアイビの口に突っ込んだ。

「すまない・・・許せ！」

大輝は散弾銃の引き金を引いた。銃声と共にアイビの頭はバラバラに飛び散った。沢山の頭蓋骨の欠片や脳みそが飛び散った。

「先生も・・・感染したのですか？」

ソフィーは痛々しい声で聞いた。

「ああ。遅かれ早かれ発症する。だが・・・」

大輝はポケットから注射器を出した。

「お前は発症しない」

大輝はソフィーの右腕を掴んで、注射するポイントを探した。

「それは何ですか？」

「抗ウイルス剤・・・いやワクチンかな。どっちでもがな」

「完成・・・してたんですか・・・？」

「ああ。だが1本しかない。製造方法を記したファイルも燃えたかな。もう製造できない」

大輝はソフィーに針を向けた。

「ちよつと痛いぞ」

大輝はソフィーの腕を消毒し、針を刺した。

「いいんですか・・・貴重な1本を私に使って？」

「いいさ。事の発展を作ったのは俺だ。俺は死ぬべき人間だ」

大輝は注射を終えた。

「ワクチンができたなら、なぜアイビにしなかった？」

大輝は、アイビの頭の無い死体に駆け寄って、注射器で血液を採取し始めた。

「ソフィーに刺した薬は感染した人の発症を止めるものだ。発症した人間を元には戻せない」

大輝はアイビの血液を信二に渡した。

「君達は生きる」

信二とソフィーは大輝の左目を見た。黒目の部分が赤くなり、白目の部分が黒くなっていた。

「発症してるのか？」

2人は黙ってうなずいた。

「そうか・・・」

大輝は信二に散弾銃を渡した。

「どうするんですか？」

「自殺するに決まってる。だが、俺は弾1発の価値もない人間だ。自殺に銃を使ったら弾がもったいない」

「どうする・・・」

信二が質問を終える前に、大輝は自身の首を折って自殺した。

「先生・・・！」

階段から誰かが降りてきた。

水谷達だった。

「信二！大丈夫か!？」

信一は信二達に駆け寄った。

「感染したのか？」

信一はソフィーに聞いた。

「ああ。だがワクチンを打った。発祥することは無い」代わりに信二が答えた。

水谷は大輝の死体に寄った。

「首が折れてるな。即死だな」

「水谷さん。これ」

信二は血液を水谷に渡した。

「これは？」

「アイビの血液です」

水谷は、無線機を取り出した。

「こちら水谷隊長。任務を成功した。目標の血液を採取した」  
返事が返ってきた。

「生け捕りではないのか？」

「専門家野村博士が生け捕りが不可能なら血液採取で十分だと言った」

「野村博士は？」

「感染、矢も得ず射殺した」

「了解。職員玄関アウトへ向かえ。着いたら連絡を取れ」

「了解。交信終了」

水谷は信二達に向いた。

「さあ、転校の時間だ」

## 決着（後書き）

グランド

また水谷から連絡が来た。

森泉は出た。

「何だ？」

『言い忘れましたが、非感染者生徒を4名を確保しました。この子達も連れて行きます』

「了解」

森泉は、部下のSAT隊員1人から報告を受けた。

「報告します。自衛隊第1特殊武器防護隊が到着しました。全員武装しています」

「では、やはり奴らは実行するのだな？」

「・・・はい」

## 悪霊（レギオン）の猛攻（前書き）

そこで、イエスが、「名はなんと云うか」とお尋ねになると、「我が名はレギオン。我々は大勢であるが故に」と言った。

新約聖書マルコによる福音書 5章9節

## 悪霊（レギオン）の猛攻

「あ、そうだ」

水谷は、信二に何かを投げた。信二は右手で受け取った。

「止血剤だ。その子に使っておけ」

信二はソフィーに止血剤を飲ませた。

「じゃあ、職員玄関へ行くぞ。準備しろ」

水谷は短機関銃を調節し始めた。信二は大輝の死体に駆け寄った。

大輝が他に何か無いか調べた。

包帯があつた。信二はソフィーへ駆け寄った。

「包帯を巻くぞ」

ソフィーはコクリとうなずいた。信二はソフィーの右肩を巻き始めた。

山田と立花は一緒に座っていた。

「立花さん。なんでそんなに落ち込んでいるの？」

立花には答えたくない質問だ。ずっと好意を抱いていた相手を殺したのだからだ。

「・・・大切な友人をこの手で殺した・・・」

「そうか・・・」

水谷は自分の銃に異状が無いことを確認した。

「よし。皆行くぞ」

水谷と信一が先頭に立った。一同は来た道を引き返し、エレベーターまで着いた。信二はソフィーに肩を貸しながら連れてきた。

全員、エレベーターに乗り、1階へ向かった。

「やっと、外へ出れる」

信二はそう呟いた。

エレベーターの扉が開き、一同はエレベーターから出た。

だが、再び絶望が一同を襲った。

職員玄関の前に大勢の感染者が立っていた。全員、目は赤かった。

「それは無いだろ」信二は小声で言った。

感染者達は赤い目で、信二達を睨んだ。うなり声を上げていた。まるで悪霊のようだった。

「悪霊」

信二は新約聖書に出てくる悪霊の名前を思い出し、呟いてしまった。

「いいえ・・・悪霊よ」

ソフィーは訂正した。

「でもレギオンのほうが今の状況に相応しい名前よ」

立花はそう言った。

「どうでもいいよ!」

山田は怒鳴った。

山田の怒鳴り声が合図のか、感染者達が奇声を上げながら一斉に走り出した。

「撃て!相沢!」

「分かってる!」

水谷と信一は短機関銃を一斉乱射した。弾丸は感染者達の体を次々と貫いた。だが、数は減るところか逆に増えていた。

「エレベーターに乗って!」

立花は怒鳴った。全員エレベーターに乗ると同時に立花は扉を閉めるボタンを押した。

扉は閉まった。

『階を指定してください』

エレベーターのスピーカーから女性の声が出た。

「おい・・・誰か足りないか?」

水谷は言った。信二は入ってる人の名前を確認した。

「水谷、相沢、俺、ソフィー、立花・・・山田は!？」

エレベーターの扉の向こう側から声がした。

「開けて!お願い!開けて!」

山田の声だった。山田が外に取り残された。立花は開けようとした。

「よせ！今あけたら感染者が入ってくる！」  
水谷は止めた。

「じゃあ、どうすればいいのですか？」

「山田君！聞こえるか！エレベーターを4階まで上げる！4階で待っている！」

「分かった！絶対4階まで来て！」

山田が走っていった・・・気がした。

立花は4階を押しした。

「こちら水谷。職員玄関前で感染者が待ち伏せしていた。脱出は不可能だ」

『了解。こちらで何か考える。それまで耐えてくれ』

「耐えろって・・・こちらはもう弾丸が少ないんだぞ！」

『繰り返し。こちらで何か考える。それまで耐えてくれ』

水谷は舌打ちした。

エレベーターは4階に着き、扉が開いた。山田が立っていた。

「さあ！早く入れ！」

だが、山田は奇声を上げながら襲い掛かってきた。良く見れば、目が赤かった。

「畜生！山田が感染した！」信二は叫んだ。

信一は山田を蹴り、外へ突き飛ばした。立花はエレベーターの扉を閉めた。

山田が扉を叩いていた。

『こちら、陸上自衛隊前原一等陸佐だ』

「前原陸佐！職員玄関は駄目です！」

『なら南校舎の屋上へ向かえ』

「了解。交信終了。立花さん、3階を押せ」

立花は言われた通り3階を押しした。

エレベーターの扉が開く。水谷と信一が外に出て、ルートを確保した。

「よし。行こう」

だが、階段から何かが上がって来た。黒目の感染者達だ。

「構うな！屋上まで行け！」

水谷は感染者を撃ちまくった。

「俺が時間を稼ぐ！相沢は連れて行け！」

信一は信二たちを連れて行った。渡り廊下を渡りきったが、2年生の教室から赤目の感染者達が出てきた。

「糞！」

信一は短機関銃で感染者の頭を次々と撃ち抜いた。だが、信二達にも襲い掛かってきた。

「くたばれ！」

信二は大輝のものだった散弾銃で感染者を撃った。反動が強く、腰だめでは撃てなかった。感染者の1人が立花に掴みかかった。

「立花！」

信二は慣れない銃で立花を助けようとしたが、信二にも感染者が掴みかかった。

立花はネックレスの十字架を握った。

「大輝君・・・ごめん！」

十字架を感染者の右目に突き刺した。感染者は苦しみながら、右目に刺さった十字架を抜いた。立花は感染者から十字架を奪い、今度は左目に刺した。感染者は完全に盲目になった。

信二は散弾銃を落とした。ソフィーは散弾銃を拾い、感染者の頭を狙った。

「撃て！」

ソフィーは散弾銃を撃った。反動で倒れたが、感染者の頭は吹き飛んだ。

「全員無事か！？」

水谷が走ってきた。後ろには大勢の感染者が。

「逃げろ！早く！」

信二は、ソフィーに肩を貸しながら、立花を連れて屋上へ向かった。

屋上へ向かう階段を駆け上がった。

「早く！こっちに来なさい！」

階段から瀬木が降りてきて、ソフィーを抱きかかえ、信二達を屋上へ誘導した。

「信一と水谷は！？」

「感染者と戦ってます」

屋上へ着いた。

屋上では、大勢のSATが待機していた。

「この子達を頼む」

瀬木はソフィーを近くの隊員に渡した。

「中にいる相沢たちを救助に向かうぞ！」

SAT達は次々と校内に入った。

信二は、外の世界を久しぶりに体験してる気分だった。

「今何時ですか？」

信二は近くの隊員に聞いた。

「夜中の2時過ぎだよ」

## 遂行

グラウンド現場司令部テント

「それで、救出者の数は？」

前原は坂田に聞いた。

「5名です。生徒3名。SAT2名」

「そうか・・・」

テントに、ガスマスクをした自衛隊員が入ってきた。

「報告します。第1特殊武器防護隊は突入準備完了です」

「屋上の扉は？」

「SATが溶接しました。感染者は文字通り校内から出れません」

前原は、少し罪悪感を感じた。

「神様お許してください」

「一等陸佐殿？」

「なんでもない」

坂田は質問した。

「救出された人たちはどうします？」

「48時間隔離だ。定期的に血液検査と唾液検査をしる。48時間

何も異常がなければ、家に帰してやれ」

「了解」

前原は、近くの通信員に言った。

「部隊を突入させる」

通信員は一瞬ためらったが、命令に従い、通信機具で指令を隊員に伝えた。

「第1特殊武器防護隊は校内に突入、感染者を全員<射殺>せよ。

例外は無しだ。繰り返し、例外は無しだ」

「了解。部隊を突入させます」

前原は、今回の作戦ほど罪悪感を感じたことは無い。



遂行（後書き）

信二は、グラウンドのテントで休まされていた。

職員玄関から、ガスマスクをした89式小銃を装備した自衛隊員が入るところを見た。

「何をするのですか？」

信二は水谷に聞いた。

「俺にもわからない」

信二は自衛隊員に聞くことにしたが、やめた。

校内に鳴り響く銃声が全てを物語っていた。

## 忌むべき作戦（前書き）

この話は読まなくても、ストーリー上支障はでません。

## 忌むべき作戦

第1特殊武器防護隊が89式小銃を装備して職員玄関から校内に入った。

職員感染者達が奇声を上げながら、自衛隊員に襲い掛かってきた。

自衛隊員は無言で次々と感染者達を射殺した。

北校舎の1階を確保した部隊は、2階へと駆け上がった。2階でも職員感染者が待ち構えていた。

自衛隊員はまた無言で射殺した。だが、生徒感染者が、職員室から出た。

自衛隊員は、一瞬ためらいを感じたが、すぐに射殺した。

隊員は次々と階段を駆け上がり、感染者を射殺した。

「こちら第1特殊武器防護隊。北校舎は鎮圧した」

『了解。南校舎を確保せよ』

自衛隊員は渡り廊下を渡り、南校舎に着いた。

南校舎でも感染者は居た。自衛隊員は無言で射殺した。

隊員全員ガスマスクをし表情は見えないが、罪悪感を感じていた。

面会（前書き）

追加最終登場人物

面会者・・・信二と面会する人物

## 面会

2日後

信二は電車に乗っていた。満員になっており、席に座るのは困難を極める。

信二は、目的の駅に降り、そのまま目的地に向かった。道の途中で本屋と玩具屋があった。

「買ってくるか」

信二は、寄り道をしたため、予定より時間が遅れた。

横浜市立市民病院

信二は入り口に入り受付に向かった。

「面会です」

信二は、受付での職員に指定された病室へと向かった。相変わらず病院の匂いは嫌いだな。そう思いながら、個室に着いた。ドアをノックし、病室に入った。

「お兄ちゃん」

出迎えたのは、今年で7歳になる妹の相沢茜あいざわあかねだった。

「よう。小さな天使」

茜は長い間外出してないためか、肌は真っ白だったが、しっとりした滑らかな髪が無造作に肩に落ち、やさしい愛らしい顔を引き立てている。声はまだ幼いが、大体の人は小さな天使と呼ぶ。

「次の面会はクリスマスじゃなかったけ？」

信二は忘れたふりをした。

「そうだったけ？忘れたな」

突然、茜の目に自信が溢れた。

「お兄ちゃん嘘ついてる」

信二は一瞬驚いた。俺の嘘を見抜いた？こいつは読心術に堪えてる

のか？

「嘘だと思っ？」

「絶対嘘。正直に言わないともう話さないよ」

嘘はやめよう・・・

「本当のことを言っつと、お前に会いたくなっつた」

「よろしい」

茜は勝ち誇った顔をした。

「何で会いたくなっつたの？」

信二は何て答えようか迷っつた。

「ええ〜と・・・そうだ！忘れる前にこれ」

信二は、袋から物を取り出した。熊のぬいぐるみだ。

「可愛い！」

茜は喜んで受け取っつた。

「それと、お前の呼んでいた少女漫画の最新刊だ」

そう言っつて漫画を渡した。

「ありがとう。もしかしてクリスマスプレゼント？」

「いいや。クリスマスプレゼントはクリスマスで渡す」

茜は、とびっきりの笑顔を見せた。

「ありがとう 兄ちゃん」

信二はその笑顔で思わず恋心に似た感情を抱いた。

「それより兄ちゃん？何で突然会いたくなっつたの？」

やはり答えないと駄目か・・・

「・・・お前入院して何年になる？」

「えつと・・・2〜3年かな。何で？」

「実は、俺転校することになっつた」

茜は、心配な顔で信二を見つめた。

「昨日、大勢の友人と別れた。長い間仲良くした友人と・・・一瞬

だつたな・・・」

「友達・・・残念だつたね・・・死んじやっつて」

信二は、驚いた。

「何で死んだと思ってるんだ」

茜は肩をすくめた。

「昨日、テレビのニュースでやってたの。兄ちゃんの学校が封鎖されて、沢山の生徒が射殺されたって」

信二は、報道陣が学校の封鎖を報道していたことをすっかり忘れていた。

「ああ・・・皆死んじゃったよ・・・友人作らなきゃ良かった・・・そう後悔してる」

茜は、寂しそうな声で話しかけた。

「どうして皆死んだの？」

「未知の病気が学校で流行ってね、病気にかかった人は皆狂暴になつたんだよ。俺は必死で逃げたり戦ったり。気が付いたら、皆死んじゃった・・・」

茜は切ない声で信二に話しかけた。

「もう我慢しなくていいよ」

その瞬間、信二の悲しみが一気にこみ上げた。自然と沢山の涙が流れ始めた。

「畜生！皆死んじゃったよ！」

信二は頭を下げた。自分の泣き顔を妹に見られたくなかった。

「畜生！畜生！」

茜は、信二の頭を黙ってなでた。

「そっだよ。思いつきり泣いていいよ」

茜は悲しそうな目で信二を見つめた。

「皆兄ちゃんを恨んでないよ」

茜は、信二の頭をなで続けた。

病室は、信二の泣き声以外、何も音がしなかった。

## 面会（後書き）

### 【次回予告】

新たな舞台で、新たな人物達で、新たな感染が始まる。  
次作「感染者の沈黙」連載予定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4889w/>

---

感染者の牙

2011年10月26日08時15分発行